



ダツカのテロ事件と
バンガラデシユの

若者たち

その背景とこれからを考える

2016 年度基幹研究

「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—
人類学におけるマイクロマクロ系の連関 2」ワークショップ (2016 年 10 月 9 日)

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求

―人類学におけるミクロローマクロ系の連関2―

二〇一六年度 ワークショップ

「ダツカのテロ事件とバンダラデシユの若者たち

―その背景とこれからのを考える―

日 時：二〇一六年一〇月九日（日）一四：〇〇～一七：三〇

会 場：アジア・アフリカ言語文化研究所・大会議室

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求

―人類学におけるマイクロマクロ系の連関2―

二〇一六年度 ワークショップ

「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち―その背景とこれからのを考える」

開会挨拶

栗屋 利江（東京外国語大学）

1

趣旨説明

外川 昌彦（東京外国語大学A A 研）

5

〈第一部〉

なぜ、あの日、あの時だったのか？

―グルシヤン事件についてバングラデシュの

イスラーム実践との関わりから考える―

高田 峰夫（広島修道大学）

15

農村の若者の生活から見たテロ事件

南出 和余（桃山学院大学）

26

家庭やコミュニティの視点から振り返るダッカ事件

石山 民子（アジア砒素ネットワーク）

35

ダッカの若者たちとテロ事件

外川 昌彦（東京外国語大学A A 研）

46

〈第二部〉

コメントとその後の展開

日下部尚徳（東京外国語大学）

67

リブライン

ディスカッション

閉会挨拶

堀口 松城 (元バングラデシュ大使、

日本バングラデシュ協会会長)

司会

丹羽 京子 (東京外国語大学)

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する

『在来知』可能性の探求―人類学におけるミクロマクロ系の連関2」

103

共催 東京外国語大学 A A 研・基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の

可能性の探求―人類学におけるミクロマクロ系の連関2」、FINDAS (東京外国語大学拠点

南アジア研究センター)、日本南アジア学会、(特活) アジア砒素ネットワーク

86 75

101

ワークショップ

「ダッカのテロ事件とバングラデシユの若者たち―その背景とこれからを考える」

日時：二〇一六年一〇月九日（日）一四：〇〇～一七：三〇

会場：アジア・アフリカ言語文化研究所・大会議室

開会挨拶

（粟屋） 本ワークショップは、東京外国語大学 A A 研・基幹研究人類学班、FINDAS（東京外国語大学拠点南アジア研究センター）、日本南アジア学会、（特活）アジア砒素ネットワークとの共催になっております。私は現在FINDASの代表であり、かつ、先月まで日本南アジア学会の企画担当の常務理事であったので、これら二つの組織を代表して挨拶をさせていただきます。

日本南アジア学会は五五〇名ほどの会員がおりまして、歴史、人類学、経済その他、あらゆるディシプリンにまたがり、横断している学会です。一方、FINDASは、人間文化研究機構による地域研究推進プログラムの一環として、二〇一〇年度から、社会運動・文学・ジェンダーを柱に南アジア社会の動態について研究を続けてきました。

二年前に現政権であるモデーイー政権が総選挙で大勝したときに、これはインドにおける大きな政治的、経済的、社会的な変化をもたらすものだという事で、初めて南アジア学会として、一般市民の参加を目的にした市民講座を開かせていただきました。これは日ごろ、研究者の間だけで喧々囂々やっている議論や研究を、少しでも一般の方々に還元する機会を作るべきだという認識に基づいたものでした。今回はいろいろなどころの共催ですが、日



本南アジア学会としては前回の市民講座の延長線で、今回の重大な事件を多角的に検証する場、皆さまと意見を交換する場として設定させていただきました。

ワークショップのタイトルとしては、「テロ事件」という表現を使っておりますが、昨今「テロ」という言葉が独り歩きしてしまっている社会状況に批判的であるべきだと、私個人は自覚しております。テロという言葉で一括することによって、思考停止になることに對して常に注意し、それぞれの事件が持つ、今回であればダッカのレストラン襲撃事件ですが、そういう個々の事件が持つ固有の条件や背景を平均化してしまうことは、避けるべきであろうと考えております。

新聞報道では高等教育を受けた、上流の若者が参加したことがクローズアップされたり、あるいはソーシャルメディアを通じて、いわゆる過激思想が広まりつつあるところから、ある意味パターン化された、このような事件の理解が定着しつつあるような印象を私個人は持っております。今回、例えば南出報告であるように、一言に青年といってもその中は多様であり、また上流階層といっても、その中にはまた多様です。ですから、紋切り型の理解に対して、批判的な姿勢を持ちつつ、そしてバンングラデシュ固有の社会的・歴史的な条件を、これまで長年にわたってバンングラデシュの社会、文化、経済などを研究し、あるいはNGOとして社会と向き合ってきた方々からの報告を通じて、独自の、唯一無二の事件として、この事件を考えてみたいと考えております。

もちろん、このように言ったからといって、グローバルレベルのさまざまな潮流と切り離すことはできないとは考えております。二〇一六年七月一日、二日のこの事件を多角的に論じてもらって、もう一つは参加者の皆さんから、ぜひとも積極的なご意見、コメントを頂ければ、この会議を設けた意義があると考えております。至って簡単ですが、私からの挨拶は以上です。よろしくお願いいたします（拍手）。

(司会) それでは早速、外川さんから趣旨説明をお願いします。

趣旨説明

外川 昌彦（AA研）

本日はお忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。
（以下スライド併用）

二〇一六年七月一日のダッカ・レストラン襲撃事件では、 Bangladesh の首都ダッカの高級住宅街を武装集団が襲撃し、日本人七名を含む多くの犠牲者を出し、日本でも非常に大きく報道されました。

独立以来、Bangladesh と日本は、政府開発援助や NGO 等の活動を通して、緊密な関係を築いてきました。その開発の現場に、まさに携わっている日本人が犠牲になるということに、関係者の間でも非常に大きな悲しみと戸惑いの声が上がりました。

志半ばで犠牲になった方々には哀悼の意を表し、この場をお借りして、関係者の皆さまには、お悔やみを申し上げます。

Bangladesh は、外務省の危機情報ではレベル二の状態となっていますが、事実上の渡航中止勧告という形で、JICA 等公的機関の活動ができない状態が続いております。東京外国語大学は、ベンガル語専攻もあります。しかし、学生の研修プログラム等もすべて停止の状態です、学生や関係者の間にも大変に不安が広がっている状態です。

本ワークショップは、このような状況を踏まえ、事件から三カ月を経て、この事件から見いだされる Bangladesh の多様な背景や、これからの新たな関わりやその可能性について

趣旨説明

<趣旨>

2016年7月1日のダッカ・テロ事件では、Bangladesh の首都ダッカの高級住宅街にあるレストランを武装集団が襲撃し、日本人7名を含む20名の犠牲者を出し、それは日本でも大きな衝撃をもって報じられた。

1971年の独立以来、Bangladesh と日本は、政府開発援助や NGO の取り組みを通して緊密な関係を築いており、その開発の現場に携わる日本人が犠牲となったことに、関係者の間には、深い悲しみと戸惑いの声があがった。

本ワークショップでは、事件から3か月がたち、その解明が進む中で、Bangladesh をフィールドにする様々な研究者や実務家を招き、この事件が生み出された Bangladesh 社会の多様な背景や、新たな Bangladesh との関わりについて、多角的な視点から考える。



て、さまざまな視点から考えることができるといふことで、企画されました。バン格拉デシユをフィールドにしている専門家の方々をお招きし、学生の皆さんと一緒に考える機会として、関係者の皆さんのご協力をえて、開催の運びとなりました。

本ワークショップは二部構成となっております。お手元の資料にありますが、このプログラムにもありますように、第一線で活躍されているバン格拉デシユの研究者にお話しいただく予定です。

初めに、社会学がご専門で、広島修道大学から来ていただいた高田峰夫先生。それからバン格拉デシユをフィールドとして、農村と都市との間の関係を考察されている、桃山学院大学の南出和余先生。それからバン格拉デシユで、NGOアジア砒素ネットワークで活動をされている石山民子さん。石山さんはこの事件を受けて、外務省に常設化された安全対策会議の第一回の会議では、NGO代表として報告もされているので、そのときの議論も含めてご紹介いただければと思っております。私、外川も、最後にご報告させていただく予定です。

続いて第二部では、東京外国語大学の日下部尚徳先生にお話を頂きます。日下部先生には、第一部の各報告へのコメントを頂くと同時に、バン格拉デシユの最新の動向について、新聞やテレビ等でも、すでにさまざまな記事やコメントを出されているので、合わせてその後の状況のアップデートについて、お話しをいただければと思っております。

その後、ディスカッションをフロアに開き、皆さま方のさまざまなご意見をうかがうことで、いろいろな議論を共有できればと思っております。

最後に、元バン格拉デシユ大使で、現在、日本バン格拉デシユ協会会長でいらっしゃる堀口松城大使に、ご挨拶を頂く予定です。



ところで、初めに今回のダッカのテロ事件の概要について、私から簡単に整理させていただきます。もちろん捜査の内容などは専門の部局にゆずり、ここでは本日の議論の論点をいくつか整理するという形で、お話ができればと考えております。

事件が起きた直後から日本のメディアは、それを非常に衝撃的な事件として、いろいろな取り上げ方を行いました。このスライドでは、その主な論点を、次の四つにまとめていきます。

①なぜ日本人が、犠牲となったのか？

②ISIL（イスラーム国）との関わりは？そして、今までに見られない新しい現象は何か？

③富裕層の若者やエリート学生が事件に関わっているが、これはどうしてなのか？

④穏健で日本とも良好な関係を築いてきたバングラデシュでなぜ？

といった疑問点が、よく取り上げられていたかと思えます。

特にISILの問題は、中東からヨーロッパや東南アジアへ、そして今回は、ほとんどそれとは無縁と見られていた穏健なムスリム社会であるバングラデシュにまで、どのように飛び火したのか。こういう問題が、よく取り上げられました。

この点については、バングラデシュ政府は、ISILの国内での活動拠点等の存在は今のところ否定しており、インターネット等の影響を受けて、若者がそういう活動に感化されているのではないか、という見方を出しております。まだ、色々な見方が出されており、その後も新たな情報が公開されているところです。

そこで私の方では、事件の一カ月後にダッカを訪れることができたので、このときにダッカの警視庁長官（Metropolitan Police Commissioner）という、ちょうど東京都の警視庁長官に当たる方にインタビューさせていただいて、以上のような疑問点についてうかがうことが

事件の直後、日本のメディアが、繰り返し報じた問題。

- ①なぜ日本人がテロの標的に
- ②いわゆるイスラーム国、ISILとの関係は
- ③なぜ富裕層の若者が
- ④穏健なムスリム国のバングラデシュで、なぜ

特に、日本でも大きく報じられたのは、ISIL（IS、いわゆるイスラーム国）の影響が、中東から飛び火して、こんなアジアの穏健な国バングラデシュにも起きている、という見方。実際に、ISILの名前で犯行声明が流され、国内のテロ組織との結びつきが取りざたされる。

しかし、バングラデシュ政府は、ISILによる国内での直接的な活動は否定し、インターネットで影響を受ける若者など、ホーム・グロウン・テロの可能性が強調された。

開会挨拶	栗屋利江（東京外国語大学）
趣旨説明	外川昌彦（東京外国語大学AA研）
<第一部>	
ダッカのテロ事件—イスラーム研究との関連で	高田峰夫（広島修道大学）
農村の若者の生活から見たテロ事件	南出和余（横山学院大学）
家庭やコミュニティの視点から振り返るダッカ事件	石山民子（アジア職業ネットワーク）
ダッカの若者たちとテロ事件	外川昌彦
<第二部>	
コメントと今後の展開	日下部尚徳（東京外国語大学）
リブライ/ディスカッション	
閉会挨拶	堀田松城（元バングラデシュ大使、日本バングラデシュ協会会長）

できました。長官の回答をまとめると、次のスライドのようになります。

犯人グループは、初めは襲撃の標的として、ラディソンやウエルスリー・ホテルなどの外国人用の高級ホテルを物色していた。しかし、これらのホテルの警備は非常に厳しいことが分かり、外国人の多いグルルシャン地区にある、警備が手薄で狙いやすいレストランを物色した。それが、ホーリー・アーティザンであった。

そのため、これは外国人をターゲットにした事件ではあるが、日本人を狙ったものとは言えない、と指摘をされました。

後でお話しをしますが、これまで過去三年にわたって、インターネットのプロガーなどを標的とした様々な殺人事件が連続して起きておりますが、その延長として、この事件を捉えることができる、という見方を示唆する指摘となっております。

実行犯に含まれていた富裕層の若者に関しては、様々な理由で家族と疎遠になり、大学の授業などにも出席しなくなっていた孤立した若者が、犯行グループによって組織に勧誘され、テロ組織のトレーニングを受けることで、事件の実行犯になった、と指摘しています。

そのため、このような組織的な活動は、それだけの資金や時間をかけて計画をしなければ難しいだろう、という観測を述べていました。また、実行犯の若者については、そのトレーニングなどの組織での活動に際しては、普段から偽名を使い、互いに自分たちの身元は明かしていなかった、ということです。実行犯を捕まえて取り調べても、その首謀者や背後のグループを特定するのがなかなか難しいのは、普段から身元などについて、互いに詳しくは知らされていなかったことが、そのひとつの理由であると述べていました。

襲撃事件での殺害方法に関しては、新聞などでもいろいろ書かれています。バン格拉デシユではチャットロ・シビル（イスラーム政党の学生組織、後述）等が行った、従来から見られるさまざまな事件と類似する手口も見られるので、必ずしも今回の事件が、まったく新

ダッカ警視庁長官 (Md. Asaduzzaman Mia, Dhaka Metropolitan Police Commissioner, 2016年8月7日のインタビューより)

- 1) 犯人グループは、はじめはラディソンなどの外国人用ホテルを物色し、最終的に警備の手薄なレストランを標的とした。
- 2) そのため、外国人をターゲットにしているが、日本人を標的にしたものではない。プロガー殺害などではアピールが足りないと考えて、対象をエスカレートさせたものと考えられる。
- 3) 実行犯は、家族から離れ、欲求不満を抱える大学生などの多数の若者から勧誘され、時間をかけて訓練されている。これは、何年も前から計画しなければ不可能。
- 4) 犯人グループは、普段から偽名を使い、互いに本名などは知らされていない。犯行を計画し、実行犯を洗脳した首謀者を特定するのが難しい、それが理由のひとつ。
- 5) 殺害方法などの手口は、以前からチャットロ・シビルなどには見られた。同時に、インターネットなどを通じた海外の影響も受けている。実行犯も、マドラサ学生とエリート大学生の混成部隊。

しい手口や方法で行われた訳ではない、と述べていました。

これまでも過激なイスラーム団体によるテロ活動が行われており、今回の事件は、むしろその延長線上で捉えることができる、という見方を強調するものとなっています。

同時に、インターネットを使ってISILによる犯行声明が流されるなど、これまでにならぬ新たな動きも認められますが、すでに国内にそういったイスラーム団体による過激化した活動があり、その上にグローバルな動きとしてISILなどの影響が及ぶことで、それが重なるのだ、という見方を示すものと思われます。

ということでは、はじめの疑問点である、なぜ日本人がテロの標的になったのか、という点については、以上のような説明から、長官は、これは必ずしも日本人を狙ったものではなく、不幸な出来事に巻き込まれた形となった、という見方を示されました。

バングラデシウのほとんどの人は親日的で、今回の事件が起きた事については、私たちも、まったく予想もしていなかったことであり、大変に大きな衝撃を受けている、と述べていました。だからこそ、この事件によって、これまでの日本とバングラデシウとの友好関係が変わることではない、かえてはならないのだ、とも述べていました。

ただ、やはりここで注意すべきなのは、そのことが、今後とも日本人が標的にはならないということ、必ずしも保証するものではない、ということだと思えます。

実際に、二〇一五年一〇月には、バングラデシウ北部の農村地帯で活動をされていたひとりの日本人・星邦男さんが、襲撃事件に巻き込まれました。また、今回の事件は衝撃的な出来事として内外に報道されることで、むしろ、外国人を狙うことのインパクトの大きさを示すことになった、という可能性もあると思われます。

事件のひと月前、六月のラマダン月の初めには、バングラデシウ警察はテロ対策という名

①「なぜ、日本人がテロの標的に」

→ この長官の説明は、たまたま外国人の集まる場所を狙ったら、そこに日本人がいた、と指摘する。

しかし、そのことが、今後日本人が標的にはならないという保証にはならない。去年10月の星邦男さん殺害事件から、そのリスクはあったと言わなければならない。

外国人を狙うことのインパクトの大きさが、今回の事件でさらに証明された、とも考えられる。

ちなみに、6月のラマダン月のはじめ、当局はテロ防止の名目で、全国で11,000人もの容疑者を検挙する。しかし、事件の実行犯はこれの中に含まれてはおらず、ラマダン月の最後の金曜日に事件は起きる。

このような、事件をめぐる宗教的背景については、特に高田さんの方から、詳しい報告を頂く予定。

目で、全国で一斉の捜査を行い、一万一〇〇〇人も容疑者を検挙しました。しかし、実際にはラマダンの最後の金曜日に今回の事件は起きてしまった訳です。テロの疑いがあるということで、たくさんの容疑者を検挙しても、肝心の犯人はそこには入っていないかった、ということになります。

そのためメディアでは、この捜査は野党を封じ込めるための政治的捜査だったと批判されました。そのラマダン月の最後の金曜日に今回の事件が起きたことの意味や、その背景としての宗教的な問題については、特に高田さんの方から、詳しくご報告をいただける予定です。

一九七一年の独立以来、バングラデシュに対して日本は、主要な援助供与国としてその国づくりを支援してきました。メガ・プロジェクトとして知られるジョムナ・ブリッジやベラマラの火力発電所、全土に広がる農村電化事業などを行い、近年は六〇〇〇億円もの援助融資の締結を行っています。

イスラーム諸国の中でも親日的な国とされ、国連の安保理非常任理事国入りでも、バングラデシュは日本の支持に回るなど、外交的にも重要な国として位置づけられています。それだけに、今回の事件は、バングラデシュの人々の間でも大変に衝撃的な出来事であったと、多くの方が話してくれました。日本人を狙うことなど考えられないことだと、私の知り合いも、皆さんそうおっしゃっています。

その意味で今回の七・一事件、ベンガル語で「ボエラ・ジュライ」と言いますが、日本人がバングラデシュの中で、もはや特別に守られた存在ではなくなったということを自覚させられる、そういう年になるのではないかとも思っております。

現地での開発支援の取り組みにも、その意味ではこれまでにない、さまざまな対応が求められると考えられます。この点については、特にNGOの現場で活動をされている

これに関連し、注目されるのは、日本人が標的に含まれたこと、ISILが犯行声明を出すようになったことは、無関係ではないこと。日本人も標的として排除しないというISILの影響が、バングラデシュでも無視できなくなっていることを示す。

1971年の独立以来、バングラデシュにとって日本は主要な援助供与国として国造りを支援。ジョムナ・ブリッジやベラマラ発電所、農村電化事業など。近年は6000億円規模のODA供与も合意。国連の非常任理事国入りで日本の支持に回るなど、イスラーム諸国の中でも親日的な国として、外交的にも重要な位置を占める。

それだけに、今回の事件の衝撃は現地でも大きく、多くのバングラデシュ人が、日本人を狙うなんて考えられない事だ、と述べる。

その意味では、2016年の7・1事件は、日本人が、バングラデシュの中で、もはや特別な存在ではないということを知覚させられた事件として、記憶されるのではないかと。

現地での開発支援への取り組みにも、これまでにない転換が求められる。この点については、外務省の安全対策会議での議論も含めて、石山さんの方から、報告を頂く予定です。

石山さんに、詳しく触れていただく予定です。

ISILとの関係については、先ほどのインタビューで長官も指摘されていたように、 Bangladesh 政府は、ホーム・グローン・テロの可能性を強調し、ISILの影響は限定的であるとして、あまり強調しないところがあります。

しかし、国際的にも影響力を広げているISILとの関係で見れば、今回、日本人が標的とされたことの背景として、ISILが国際社会に向けて行う声明に、特に去年の秋以降、日本人もまたその標的として排除しないという主張なされるようになったことが、指摘されています。

この問題は、こちらのA A 研の所長で中東イスラーム研究者として知られる飯塚正人さんからも指摘をされたのですが、今回の事件は、その意味ではやはり、中東諸国を中心としたISILのグローバルな動きとも、無関係ではないことは間違いないと思われます。

同時に、特にBangladesh の国内では、事件の実行犯やそのグループを支えた背後の組織などの背景に、やはり国内でのイスラーム政党や野党との抗争などの、長年にわたるBangladesh における政党やフロント組織間の政治闘争という問題が、横たわっていることが指摘されています。

特に、国内政治で大きく取り上げられる代表的なイスラーム政党は、ジャマーアテ・イスラミー党（以下、JI 党、通称はイスラーム協会）です。警視庁長官が示唆しているのも、実は今回の事件の背景を、このJI 党との関係を通して捉えるものでした。

JI 党は、パキスタンの思想家アブー・アラール・マウドウディーによって創設されました。しかし、一九七一年のBangladesh の独立戦争では、パキスタンを分裂させることに反対して、この政党の傘下に多くの私兵団が組織され、多数の戦争犠牲者、独立運動家への

②「いわゆるイスラーム国、ISILとの関係」

→ 長官は、直接的な結びつきは否定し、インターネットなどの影響を受けた、ホーム・グローン・テロの可能性を強調。

むしろ計画犯の背景を、ジャマーアテ・イスラミー党 (JI 党) や、その学生組織チャットロ・シビルとの関係から捉え、ハシナ政権に揺さぶりをかけるために、既存のローカルな組織が過激化したものと指摘。

JI 党は、パキスタンのマウドウディーによって創設された代表的なイスラーム政党で、独立戦争では、Bangladesh の独立に反対して、多数の独立運動家やヒンドゥー教徒を殺害、女性への暴力に関与する。

独立後、Bangladesh では政治活動が禁止されたが、様々な分野にその影響力を浸透させ、政治のメインストリームに復活する。

当時の戦争犯罪の容疑者が、そのまま政党活動を続けることには、国民の反感も根強く、それが最終的に、アワミ政権による、国際戦争犯罪法廷の設置に結びつく。

殺害や、ヒンドゥー教徒への虐殺、女性に対する暴力が行われました。

バングラデシュが独立してから、しかしこのJ I党は、イスラーム政党としての影響力を取り戻し、政治のメインストリームに復帰します。しかし、やはりそれに対する人々の反発も大きく、後で詳しく触れるように、その過程でさまざまな問題が起きました。

アワミ連盟政権が国際戦争犯罪法廷を開設し、一九七一年の独立戦争時の戦争犯罪者を、四五年も経過した今になって裁判にかけるという動きもまた、こういうバングラデシュにおける宗教と政治をめぐる問題を、背景にしたものと考えられます。

戦争犯罪者として訴追されることよって、近年、イスラーム政党は非常に弱体化し、公的な活動ができなくなります。しかし、追い詰められてゆくことで、逆に活動家が地下に潜り、その活動がより過激化してゆくという悪循環も見られます。

事件の実行犯の組織的背景として、長官が示唆する団体もまたこのイスラーム政党の学生組織が過激化したものでした。私の報告では、このようなバングラデシュにおける宗教と政治との関わりについて、お話しができればと思っています。

ところで、三番目の論点として、今回の事件の実行犯に、富裕層の若者やエリート学生が関わっているが、これはどうしてなのか、という問題があげられます。

従来のバングラデシュでは、このようなイスラーム過激主義の運動の背景として、しばしば指摘されるのは貧困の問題でした。特に、教育を受けられない農村部の貧困層の子弟に、無償で教育を施すイスラームの神学校、マドラサ学校の拡大が指摘されてきました。

アフガニスタンでは、イスラームの過激思想が広まってゆく背景として、しばしばこのマドラサが取り上げられています。IS ILとならぶ国際的なテロ運動として紹介される

③「なぜ富裕層の若者が」

実行犯の多くが富裕層の若者で、リーダー格の犯人が、名門私立大学の出身。当初は人質として現場にいた同大学の元教師は、共犯関係にあるとされ逮捕。実行犯の5人が直前まで潜伏していたアパートの家主は同大学の副学長で、アジトを提供したとして逮捕。7月26日のコッラン事件でも同大学の学生が3人。2013年2月のプロガー殺害事件でも同大学の6人の学生が実行犯として逮捕される。

こうして、大学がテロ組織の勧誘の場となっていることが問題とされ、富裕層のエリート学生が、なぜテロに勧誘されるのか、議論となる。



戦争犯罪法廷では、J I党の幹部が次々に逮捕され、有罪とされ、また、政党活動が禁止されることで、イスラーム政党は、追い詰められてゆく。このようなバングラデシュにおける政治と宗教の問題は、今回の事件でも、大きな背景と考えられる。この点については、外川報告でも触れる予定。

同時に、今回の事件は、これまでとは異なる性格も指摘される。農村の貧困層にマドラサ神学校が広がり、それがテロの温床になっている、といった既存のイメージとは異なり、富裕層の有名大学の学生が事件に関与し、インターネットの影響を強く受けるなど、これまでにない特徴が指摘された。これは、「なぜ富裕層の若者が」という問題に結びつく。



「ターリバーン」も、もともとはこのようなマドラサと呼ばれるイスラーム神学校の学生を意味する言葉でした。

しかし、今回の事件で実行犯とされた若者を見ると、貧困層の子弟もいますが、特にバングラデシュでも名門の私立大学の学生などが事件に関与していたことが、大きく報道されました。貧困問題を背景として、農村部に広まるマドラサ学校を温床として、イスラームの過激主義的運動が広まってゆくといふこれまでのバングラデシュの状況とは、それはまったく異なったところから、このような過激思想に影響を受けた若者が出ていることが、報じられました。

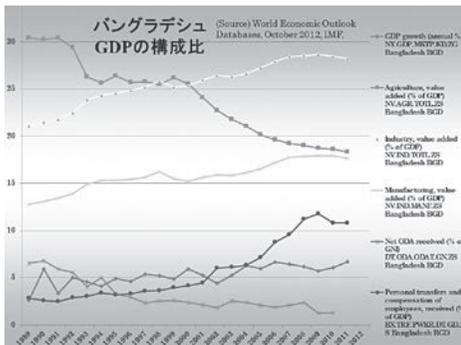
その背景には、バングラデシュが、近年、急速な経済成長を続けており、中間層の厚みが増して、農村部の識字率も高まっている中で、さまざまな変化にさらされているという問題が指摘できると思います。

現在、バングラデシュの合計特殊出生率は二・一四という事で、若者の人口比率が高く、人口の半分以上が二四歳以下という、大変に若い国です。

そういう現代のバングラデシュの若者を取り巻く状況については、特に南出さんの報告の方で、詳しくお話しをいただける予定です。

現在のバングラデシュは、急速な社会変化を遂げながら、教育などの社会インフラの整備が追い付かず、若者の雇用などの問題、社会体制や治安対策などのさまざまな課題が、なお社会の急速な変化に追い付いていない、という状況が指摘されます。

この辺は農村のライフスタイルの変化など、石山さんの報告でも紹介が頂けると思います。最近では二〇一三年のラナ・プラザ工場の崩落事件では、一〇〇〇人を超える方が犠牲



人口1億6千万人の Bangladesh は、人口の半数以上が24歳以下の若者の国。青年男子(15-24歳)の識字率は77%、女子は80%。携帯電話の保有者は、1億1,400万人、インターネットは、3,300万人、ブログは800万人(2013年推計)とされる。

廉価な労働力によって世界第二位の衣料品の輸出国となり、過去10年間のGDPの平均成長率が6%以上の安定した経済成長を続ける。政府は、2021年までに中所得国入りを目指す「ビジョン2021」を掲げ、グローバル企業は、BOPビジネスの新たな市場として注目する。その Bangladesh の若者を取り巻く多様な状況については、特に南出さんから報告を頂く予定。



BangladeshのGDP成長率の推移

となりました。これも、あまりに急速で過剰な開発と、それに社会制度や体制が追い付いていないという状況から、このような悲劇的な事故が起きたものと考えることができます。

今回のテロ事件は、そのような急速な変化にさらされ、脆弱性の高い今日のバングラデシュの、その社会的なリスクの高さを象徴する事件でもあったとも考えています。

最後は、穏健な国と言われるバングラデシュで、なぜテロ事件が起きたのか、という問題です。バングラデシュは、国の成り立ちとしては新しいのですが、印パ分離や英領インド、あるいは前近代からのベンガル地方の長い歴史を見ると、その中で培われてきた民衆の文化、ベンガルの人々の文化は、古代の仏教時代の文化から、ヒンドゥー教の文化、近世以降のイスラーム文化へと、多様性に富んだ豊かな歴史を持っています。

そのベンガル社会の多様性を背景に押さえておかないと、国際的なイスラーム主義運動との関係だけで人々の動きを理解し、あるいは政治的な背景だけで今回の事件を説明することで、終わってしまうのではないかと考えています。

もちろん、政治的な問題が重要な要素であることは間違いないのですが、しかしそれだけでは、イスラーム政党の活動に対する人々の微妙な反応や、四五年前の独立戦争に対する今の若い世代の人々の思いなど、バングラデシュの人々の多様な考え方が生まれてくる背景は、なかなか見えてこないのではないかと考えています。

この点については、時間の許す範囲で議論ができればと思っておりますが、本日のところは、ともかくその論点の一つとして、指摘ができればと思っております。

それでは、それぞれの報告に移らせていただきます。

④「穏健なムスリム国のバングラデシュでなぜ」

この問題を見てゆくためには、1947年の印パ分離独立や、前近代のヒンドゥー教とイスラームの共生など、東ベンガル地方の多様な民衆文化の歴史を通して、見てゆく必要がある。

バングラデシュの文化は、実際には独立以前からの南アジアの長い歴史を通して形作られてきた。



しかし、急速な経済成長の影で、2013年4月のラナ・プラザ工場の崩落事故では、死者1,129人、負傷者2,500人を生む。シャハバグ市民運動とその後連続テロ事件では、多数の犠牲者を生む。

今回の事件は、急速な社会変化を遂げながら、社会インフラや治安対策などが追いつかない、バングラデシュの社会的なリスクの高さを示している。



第一部

「なぜ、あの日、あの時だったのか？

—グルシヤン事件についてバングラデシユの

イスラーム実践との関わりから考える—」

高田 峰夫（広島修道大学）

こんにちは、高田です。事前お知らせとは違うタイトルですが、私自身は、今日はちょっと細かい話をしてみたいと思います。

具体的に言うと、なぜあの日、あのときだったのかを考える。それは理由があります。事件の直後にもすごくたくさんの取材を受けたのですが、当然というか、若干不思議でもあったのですが、私の発言はほとんど報道されませんでした。理由がありまして、私は分からないことは分からないと正直に言ったのです。分からないことを分かったふりをするのは嫌だったので、分からないことは分からないと、ただそう言っただけなのですが、そうしたらほとんど報道されませんでした。要するに報道する人たちは、勝手に自分たちでストーリーを作っていて、それに合うことだけを報道するのです。それはおかしいだろうと。しかも基本的な事実を全然踏まえない報道までしていて、そういうやり方はどうなのかなど。

それからもう一つは、バングラデシユに対して、どこか差別的な視線を感じることがありました。どちらかというと、バングラデシユをややおとしめるような、それからバングラデ

日本での報道に対する違和感

- 取材を受けて感じたこと
- 基本的な事実を踏まえない、センセーショナルな報道姿勢。
- バングラデシユに対する差別的な視線
- 実は現地の普通の人々（特にムスリムたち）が、非常に衝撃を受けて、いわばパニック状態になっていた。
- 本当のところはどうなのか？—可能な限り事実に基づく検討の必要性。



シユのムスリムに対して恐怖感を抱かせるような報道、私から言わせると偏向報道がかなりありました。確かに日本人七名の方が犠牲になったのは、もちろん痛ましいことです。でも、明らかにちよつとあおりすぎではないかと。要するにバングラデシユなら好きなだけたいたいでもいいと、どうもそういう印象がありました。これは後で若干ご紹介します。

現地でも、実はこれ（海外の報道姿勢等）にはかなり反発しています。むしろ現地の人自身、ごく普通のムスリムの人たちが、今回の事件ではものすごく衝撃を受けて、明らかにパニック状態に近くなっているのです。でも、そういうことも報じないのです。

それから、本当のところはどうだったのかというのを、可能な限り事実に基づいて検討することが必要だと。ここでは細かく、全部はできませんから、日時だけに絞って若干検討してみたいと思います。

まずグルシヤン事件の概要ですが、細かいことは抜きにします。現地時間の二〇一六年七月一日夜、二〇時四五分。日本とは三時間の時差があるので、日本時間だと二三時四五分です。武装勢力がダッカの高級住宅街グルシヤンのホーリー・アーティザン・ベーカリー・レストランに、銃撃戦を行い、突入して立てこもりました。彼らは、どうも本来、銃撃戦をやつて事件を起こしたら、逃げるつもりだったらしいのですが、逃げそこなって立てこもつたのです。従業員の人たちも合わせて三〇〜三二名ぐらい、人質に取つて立てこもりました。

周りを警官隊、さらに現地の空軍、海軍、警察、国境警備隊、それからRAB (Rapid Action Battalion) という特殊部隊、さらに突入専門の部隊SWAT、これらが連携して全部取り囲んで、翌朝二日の七時四〇分ごろ、完全に明るくなってから、Operation Thunderbolt という作戦を行いました。

激しい銃撃戦になり、結局八時半ごろに作戦が終了したのですが、人質のうち、助かった

グルシヤン事件の概要

—現地紙の複数報道から要約—

- 現地時間**2016年7月1日20:45頃**(日本時間で同日23:45)、武装勢力がダッカの高級住宅街グルシヤンのHoley Artisan Bakeryレストランに突如乱入。
- 7月2日01:30頃、ISがネット上で、同事件は自分たちが実行した、と主張するビデオを流し始める。
- 7:40頃(=完全に明るくなった頃)、“Operation Thunderbolt”開始、部隊突入。
- 8:30頃、作戦終了。
- 12:45、公式記者会見。
- 身元確認作業終了。犠牲者20名の内訳=日本人7名、イタリア人9名、バングラデシユ人3名、インド人1名。ここにバングラデシユ人シェフ1名、殉職警官2名を加え、事件の被害者は合計23名。犯人5名も全員死亡。

人たちは解放されたし、助からなかった人たちは残念ながら遺体で発見されることになりました。

昼ごろ、公式の会見で結局分かったのは、犯人六名射殺と。ただし、後で分かったのは、犯人と言われていたうちの一名は、実はこのピザ担当のシェフで、実際犯人は五人でした。それから犯人は一名確保したと当初は言われていたのですが、これは全く不明のままです（後に人質の中の一名、元大学講師が犯人側の協力者の疑いで拘束されていると判明。その人物のことらしい）。それから人質のうち、一三名は救出されて、二〇名が死亡。二〇名の内訳は、日本人七名、イタリア人九名、バングラデシユ人三名、インド人一名。後からこれに誤射されたバングラデシユ人のシェフ一名と殉職の警官二名が加わって、結局二三名が犠牲になりました。それから、犯人五名も全員射殺されました。

まず考えてみたいのは、なぜ七月一日だったのか。

簡単に結論から言うと、犯人たちは明らかにあの夜を意図的に狙ったのです。これはバングラデシユのムスリムのさまざまな風俗や慣習が絡むので、細かいことは全部言えません。ですから、以下では直接関連することだけ述べたいと思います。

それから誤解のないように言っておきますが、ここで述べることは、あくまでもバングラデシユのムスリムが一般的に行っていることであり、および彼らの一般的なイスラーム解釈であって、イスラーム社会全部に同じように通用するわけではありませんから、誤解しないでください。

まずヒジュラ暦というイスラームの暦の第九月は、ラマダン月。バングラデシユ語で言うところムジャン・マーシユです。ムスリムがなすべき五つの行のうちの一つである断食（アラ

2016年7月1日（1）

- ・ヒジュラ暦第九月＝ラマダーン月。「断食」(アラビア語でサウム、ベンガル語でロジャ)の最中だった。
- ・この期間、ムスリムは日の出前の礼拝(ファジャル)の前から日没まで、一切の飲食禁止。
- ・今年2016年の場合、ラマダーンは6月7日から開始。1年間で最も昼間が長い時期。夜明け前から日没まで(約14～15時間)、水さえ飲めない ⇒かなり辛い。
- ・7月1日はラマダーン月終盤。人々の体力、気力、注意力が低下。
- ・警備担当者や警察等も同様。その結果、警戒が緩む。

なぜ2016年7月1日の夜だったのか？

- ・グルシヤン事件の犯人たちは、ラマダーン終盤の、「あの日、あの時」を意図的に狙った。
- ・この事件には、実はバングラデシユ・ムスリムの風俗習慣が色々絡むが、以下では直接関連することのみ言及。
- ・ここで言う説明は、あくまでもバングラデシユ・ムスリムが一般的に行っていること、ないし、彼らに一般的なイスラーム理解についてであって、全イスラーム世界が同じなわけではない。
- ・日時以外に検討すべき多くの問題があるが、省略。

ビア語でサウム、ベンガル語でロジャ)の最中でした。

この間ムスリムは、日の出前の礼拝(ファジャル)があります。その前から日没までは、一切の飲食が禁止です。日没後は飲食できるのですが、この時期は一般のムスリムの中で、かなり普段はいい加減な振る舞いをしている人も、どちらかというと禁欲的になります。細かい事例があるのですが、事例は全部飛ばします。

今年二〇一六年の場合で言うと、ラマダンは六月七日から始まったので、ちょうど夏至を挟む時期なので、非常に日が長いのです。ですから、彼らが一切飲食できない時間は、一四〜一五時間に上ります。その間、水さえ飲めません。特に厳格な人は、私の知り合いに何人かいますが、つばさえ飲み込みません。口の中にあるつばも、全部吐きます。日が沈むころになって、ようやくイフタールが取れるのですが、そうやってもかなり消耗するのです。そうすると、それがずっと続いて三週間たちますから、この七月一日ごろ、三週間たったころになると、みんな体力を消耗してしまふのです。役所などに行ってみれば分かりますが、昼間はみんなやる気がなく、ダラーつとしています。やる気がないのも、やろうとしても体力も気力もなくなってくるのです。そうすると、当然、体力も気力も注意力も落ちてきます。これは町を警備している、警備の担当者や警官なども一緒です。つまり意図的に狙うなら、非常に狙いやすくなります。

それからもう一つは、このラマダンが明けると、大祭のイードというものがあります。イード・アル・フィットルといいますが、このイードのときには、バングラデシュのムスリムの人たちの多くは村に帰ります。ちょうどかつて日本ではお正月は、暮れに帰って田舎を迎える人が多かった。今でも結構多いですが、それと同じように、故郷に帰る人がすごく多いです。ちょうどイードの一週間前ぐらいになると、続々とダッカを離れて地方に向かうよう

2016年7月1日 (2)

- ・ラマダーン月の断食期間が明けた後には大祭「イード」がある。
- ・バングラデシュでは多くの人々が故郷に帰り、実家でこの「イード」を迎える。
- ・7月1日は、すでにかかなり多くの人々が帰郷の旅に出ている。
- ・その結果、ダッカでは人通りが少なくなる。
- ・警備担当者たちもイードや故郷へと気持ちを向けるため、さらに警戒が緩みがち。

になります。今年の七月一日には、もう新聞にたくさんの方が故郷に向かっていているという記事が前日に載っているぐらいで、かなりダツカはスカスカになってきました。人通りも少ないですから、ますます警備は緩みます。そういう時期なのです。

もう一つは、ちょうどこの日が、バングラデシュのムスリムでは非常に重要な時期とされています。ラマダン月の上旬、中旬、下旬と分けた最後の一日間は、ラマダン月の中でも特に聖なる期間とされています。さらに発生の当日は、最後の金曜日です。イスラームで、金曜日は非常に聖なる日ですが、特にこのラマダン月の最後の金曜日は、*Jumatul Wida* という非常に聖なる日とされていて、集団礼拝を行うのですが、これは現地の新聞に載るぐらいです。

例えばこう書いてあります。*Jumatul Wida's Day*。これはコピペしたもので、現地のデイリー・スターという新聞です。細かくは読み上げませんが、この日は特に聖なる日とされているのですが、それがある意味、わざと踏みこむようなことを、この日を狙ってやっています。

それから、その翌日はこれもまた非常に重要な日です。*Lailatul Qadr* (力の日)と呼ばれる、預言者ムハンマドがアッラーフから最初の啓示を受けたとされる日で、バングラデシュではこの夜にモスクに行つて、モスクに行かなくてもですが、祈りをささげると、普段の一〇〇〇カ月分のご利益があるとされています。日本で四万六千日と言っているのと似たようなものです。ですから、非常に重要視されていて、もうほとんどの人が徹夜で祈りをささげる準備をしていて、そうすると徹夜で祈りをささげて、みんなさらにへ口へ口になります

2016年7月2日

- 2016年7月2日(=事件が悲劇的な終わりを告げた日)の晩は*Lailatul Qadr*(力の日)。この夜、預言者ムハンマドがアッラーフから最初の啓示を受けたとされる。
- バングラデシュでは、この夜にモスクに行つて祈りを捧げれば、普段の1000カ月分のご利益があるとされる。
- 多くの人が徹夜で祈りを捧げる。(そのため、翌日は国の休日)。

2016年7月1日 (3)

—*Jumatul Wida*—

- バングラデシュ・ムスリムの間では、ラマダン月終盤の10日間は聖なる期間とされる。
- 事件発生当日は、ラマダン期間の最後の金曜日、*Jumatul Wida*と呼ばれ特に聖なる日。この日の礼拝は非常に重要視されている。

から、次の日はお休みなのです。

そのように、七月一日は特別な日です。同時に二〇時四五分という襲撃時間も、実によく考えられています。

ラマダーン月の夕方は、人々は一斉に外に出ます。なぜかというところ、まず日没の直後には、「イフタール」という最初の食事で簡単なスナックを取るのですが、このときにはもう国中ほとんどがストップします。長距離バスも、それまで走っていても、その時間になるとピタッと止まって、その近くでみんなこのイフタールを取りにいぐぐらいます。ほとんどの活動が一瞬止まります。三〇分ぐらいですかね。それから人々がまた一斉に動き出すのです。そして人々は社交にいそしんだり、買い物をしたりします。

そうすると、外国人も大体そのパターンに合わせますから、この日だとイフタールの時間は一八時五三分でした。ですから人々が再び動き出したのが、一九時三〇分ごろです。そして、動き出して、レストランなどに入る人が出始めるのが八時ごろです。要するに八時四五分ぐらいになると、ちょうどレストランも大体埋まってくるという時間なのです。その時間を恐らく十分に考えて狙ったのです。

つまり一番目と二番目の点から言うと、犯行グループはバングラデシュのムスリムたちの習慣を十分に知っていて、利用したのです。そして警戒が緩む時期を狙っています。

それから三番目と四番目から言えることは、バングラデシュのムスリムにとって、この日特に神聖視されていることを知っていながら、それをわざとじゅうりんするようなことをして、「冒瀆」しているのです。

それから五番目から分かるのは、現地の人々の行動パターンをよく知っている上で、ター

「日時」が意味すること

- ①と②⇒犯人グループはバングラデシュのムスリムたちの習慣を十分に承知・利用して、警戒が緩む時期を狙った。
- ③と④⇒犯人たちは、バングラデシュ・ムスリムにとって、特にこの日が重要で神聖視されることを知っていた。同時に、一般のムスリムが神聖視するその日をあえて暴力的テロ事件の日を選び、意図的に「冒瀆」した。
- ⑤⇒彼らが現地の人々の行動(それに合わせた外国人の行動)パターンと当日のイフタールの時間とを考え合わせて慎重に検討し、確実にターゲットが得られる時間帯を選んだ。

20:45という襲撃時間

ムスリムたちの行動パターン

- ラマダーン月の夕方(日没後)は、人々が一斉に外へ出る
- 「イフタール」と呼ばれる日没直後のスナックの時間帯は、国中が一時的に他の活動の停止状態。
- ムスリムたちはショッピングや社交にいそむ。人々はイフタール終了後に準備を始めて、外出。
- 外国人もそれに合わせた行動。
- 7月1日のイフタールの時間は18:53だった。したがって、人々が動き出すのは19:30前後、レストランに客が多くなるのは20:30前後だったはず。

ゲットになる人たちがちょうど場所に来る時間を狙っています。ターゲットを確実に狙えるときを狙っています。

要するに彼ら自身の、いわば「テロリスト」としての目で見ると、攻撃を成功させる確率を高めるために、非常に周到に練られた作戦です。

他方、彼らの「ムスリム」としての視点から言うと、一般のムスリムが理解し意味するイスラームとその実践・慣行を、意図的に無視して、むしろ蹂躪（じゅうりん）していることを意味します。

今日はお話しすることはできませんが、この五日後、七月六日に、キシヨルゴンジのショラキアというところで、やはり襲撃事件がありました。そのときにも同じことをやっています。要するに彼らは、意図的にこれを行っているのです。

結局ここから言えるのは、彼らが主張する「イスラーム」とそれに基づく行動は、バングラデシュの一般のムスリムたちの理解・実践するイスラームとはかなり違うものだ。ですから、一般のムスリムから、ものすごく反発を浴びています。「あんなやつらはムスリムではない」「イスラームであんなことは許されていない」、それから「アッラーはやつらを許さない」というのは、多くの人から聞きました。

そういう意味では、彼らは一般の人のイスラームを無視した行動を意図的に取っていて、その意味で言うと、彼らのやっていることは、イスラームの文脈で理解しようとしても限度があるということです。

他方で、彼らが「イスラーム」の名で説かれた過激思想に反応して、その網に絡み取られてしまっているのは間違いありません。ですから、そこで説かれた内容や過激な主張の口

まとめ

- ・彼らは、普通に考える意味でのイスラームをほぼ無視した行動を、意図的に取っている。彼らをイスラームの文脈で理解しようとしても限度がある。
- ・他方、彼らが「イスラーム」の名で説かれた過激思想に反応し、その網に絡め取られてしまったことは、事実。そこで説かれた内容、過激な主張のロジック、等の理解には、広義のイスラーム(主義)からの理解は欠かせない。
- ・同時に、マレーシアやカナダ等との関連は、グルシャン事件のような「ローカル」な事件も、グローバル化の問題を抜きにしては理解が難しいことを示唆。

その含意

- ・「テロリスト」としての視点からすれば、攻撃を成功させる確率を高めるために周到に練られた作戦を意味。
- ・「ムスリム」としての視点から言えば、一般のムスリムが理解する意味でのイスラームとその実践、慣行を意図的に無視、蹂躪した、ということの意味。
- ・間接的には彼ら(過激な武装勢力、「原理主義」勢力)が主張する「イスラーム」(理解・解釈)とそれに基づく行動が、バンラデシュの一般のムスリムの人々の理解・実践するイスラームとは異なるものだ、ということの表明。

ジックなどを理解するためには、特にイスラーム主義と言われるとき、広い意味でのイスラームという方向からの理解は欠かせないのは、間違いないと思います。

それから、犯人のうちの二名の留学先がマレーシアだとか、犯人たちを裏で糸を引いていたと言われる黒幕とされた人物の出身地がカナダであるとか、こういうことを考えると、グルシヤン事件のような「ローカル」な事件も、グローバル化の問題や文脈を抜きにしては理解が難しいだろうということです。

少しこれに関連することをご紹介します。事件のその後ですが、彼らはどうなったのか。実行犯五人の遺体は、引き取り手のない遺体、要するに身元不明者扱いで、イスラーム系の福祉団体の手によって、ダッカ郊外の墓地に葬られました。犯人たちの家族の中には、自分の息子たちがやったことをものすごく非難して、強く引き取りを拒否した人たちもいます。それから一部の人たちは、周りから言われて引き取ることをあきらめた人もいたようです。分かりませんが。

墓地の名前は公表されていますが、その墓地のどこに埋められたかは公表されていません。ですから葬儀に際して、彼らのために家族が祈りをささげることはできませんでした。

バングラデシユのイスラームの慣習から言うと、まず死者が出れば遺体を清拭して、モスクで祈りをささげてから、墓地に男性親族が遺体を運びます。そして土葬ですが、埋葬すると、最後にアッラーフに死者の行いに対して許しを請う（ベンガル語でナマズ・エ・ジャナザ、アラビア語では *salat al janazah*）祈りを *yu'ajjuz* げます。

現地では、この祈りがないと、死者は死後の平安が保証されません。また人によってはアッラーフに罰せられると言います。バングラデシユのイスラームは、イスラームの四大法学派のうちのハナフィー法学派がほとんどです。同法学派の場合、遺体を目の前にしてしか、このジャナザはできないと言われています。

つまり今回の遺体の取り扱いによって、家族が事件の実行犯たちの許しをアッラーフに請う公式の機会はなくなってしまうわけです。彼らは彼ら流の「イスラーム」解釈で、自分たちは殉教者になるのだ、天国行きは確実だと言って死んでいったわけです。実際にどの事件でも、投降するのではなく彼らは死を選びます。

それから、これは一部のメディアの関係者の人に聞いたのですが、彼らの中には捕まっている人もいるのですが、決して自白や情報を漏らさず、殺すなら殺せと。そうすれば自分たちは殉教者だと言うので、もう非常にたちが悪くて困っていると言っています。

ところが、先ほどの遺体の扱いは、一般のムスリムの解釈では、もうほとんど、どちらかというと地獄行きの方が可能性大ということを意味しています。この点は現地の方は、非常によく分かっているようです。何人かの人が、遺体の引き取り手がないと、最後こうなるのではないかと。そうすると、「何とも恐ろしい」と、そう言っていました。

同時に、こういう恐ろしいことになるかと分かっていたら、要するにジャナザなしの葬儀で、地獄行きの可能性が生まれるなどと多くの人が知れば、もうこれ以上テロなんてばかなことをやろうとする連中もいなくなるから、ちょうどいいと言っている人たちもいました。ここでも彼らが考える「イスラーム」と、一般の人々の考えるイスラームは、かなり鋭く対立しているのが見て取れると思います。

それから最後にグルシャン事件についてですが、今も継続中で、まだ終わったわけではありません。ほぼ毎日のように関連する出来事が生じています。それを報じるニュースは、現地の新聞に載っています。最新のものでは昨日一〇月八日、ガジプールというところで二カ所、それからタンガイル、その三カ所で武装勢力に対する掃討作戦が一斉に行われて、合計一一名、全員射殺されました。

それからもう一カ所、サバルというところでの捕獲作戦では、逃走しようとした犯人が

五階から飛び降りて事故死しています。ですから、この事件はまだまだ当分終わりにはならないだろうというのが、私の考えです。

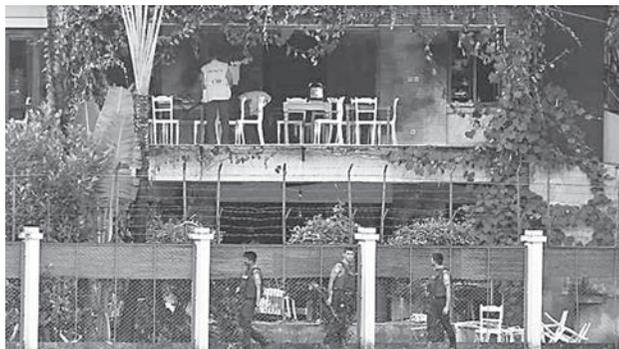
簡単に現場と現地の様子を、ちょっとだけお見せしましょう。これは事件があったホーリー・アーティザン・ベーカーリー・カフェなのですが、前はこのようにきれいでしたが、事件の当日こんなことになってしまいました。

今、その後どうなったかというと、私が行ったのが八月の末だったか九月に入ってからか、ちようど二カ月後ぐらいに行ったのですが、今は荒涼としています。現地は今でも完全に立ち入り禁止です。花を持っていったので特別に入れてもらえたのですが、写真はさすがに撮りませんでした。今はもう本当にそのまま、全部朽ち果てていて、また周りも人が来ないので、異常なぐらい静かです。本当に不気味なぐらいです。

それから犯人が、ここから恐らく歩いて先ほどの現場まで移動したと思われる、最後の潜伏先です。前線基地。このアパートにいたことが確認されています。現地でちようど突き止めたので見に行きましたが、ただごく普通の、ダツカのそこら中にたくさんあるアパートにそういう人たちがいたこと自体が、私にはむしろ一番不気味でした。

それから、これはその後、犯人の一部が立てこもって、九人殺害されたコッランブルというところですか。ここは表通りからほんのちようど入っただけで、意外とにぎやかなところにあります。こんなところでそんなすごい銃撃戦があったというのも、なかなか信じられないくらいでした。

現地では、一般の人は今ものすごく不安に感じています。



例えばこれも、実際にこうやって揶揄（やゆ）する漫画が出るぐらいで、学校などでも今ものすごく徹底的な警備をやっています。みんなが不安に思っています。ですから、外国人が不安というだけではなく、今はバン格拉デシユの一般の人でも不安で不安で仕方がない状態です。要するに、いつ、どこで、誰がやられるのか分からないという不安感です。

他方で、ここに keno bideshi chap (注：ベンガル語で「なぜ外国の圧力」の意味)、要するに何でバン格拉デシユばかり外国から圧力を受けなければいけないのだと。よそだって、トルコのイスタンブールでもパリでもニースでも事件がたくさんあって、そういうところはそんなにたたかれないのに、何でバン格拉デシユばかり、そんなに圧力を掛けられるのだと言って、やはりすごく不満も出ています。やはりその点は差別的な扱いを受けていると、彼らも感じているのだと思います。では、時間ですので終わります。

(司会) ありがとうございます。

それでは南出さん、お願いします。



「農村の若者からみたテロ事件」

南出 和余（桃山学院大学）

私の報告では今回の事件を農村の若者の視点から考えてみたいと思います。

私は বাংলাদেশ シュ農村での若者研究に従事しておりますが、外川さんより、今回の事件が若者による犯行であったことから「農村の若者の視点」から報告するよう言われたとき、とても躊躇しました。

その理由は、一つは最初に粟屋先生からもご指摘があったように、果たして一枚岩で考えられる問題なのかということ。「 বাংলাদেশ シュ」「テロ」、そして「若者」「イスラーム」というキーワードが、それぞれにきわめて多様性を帯びたキーワードであり、これをまとめて語る危険性があるのではないかと感じたからです。「若者」をもう少し丁寧に見なければならぬのではないかと、それにはちょっと時間が足りないかと、最初は外川さんに申し上げたのですが、しかしこの機会だからこそ考える必要があるという結論に至りました。結果的には私自身も整理をするいい機会を頂いたと思っています。特に、果たして「 বাংলাদেশ シュの若者」と一括りにできるぐらいの共通の状況があるのかは疑問で、そこには日本の若者以上にきわめて多様な状況が見られます。

もう一つの疑問として、この事件に対する認識が、 বাংলাদেশ シュにおいても大きな乖離（かいり）があるというのは、先ほどの高田先生のご報告にもあったとおりでと思います。

また日本においても認識の乖離は大きいのではないかと感じています。ちょうど事件があった直後に勤務先の大学生らと話しましたが、ISの声明文のなかに「日本人を殺害した」とは出てこず、「十字軍を」というなかに日本が含まれていることに対する認識は、多くの日本の若者たちの間ではほとんどないかと思えます。この বাংলাদেশ シュの七・



一事件後すぐ日本では参議院選挙がありました。日本の政治とこの事件の関わりはほとんどメディアなどにも指摘されなかったのではないかと思えます。

日本での認識にも乖離があり、そしてバングラデシュ側でも乖離が大きくあるというところでも、やはりこの事件をどう論じるかはとても難しいと感じています。

という前置きのもと、では私に何が言えるかというところ、普段の調査の中で付き合っているバングラデシュ農村の若者たちの状況と視点から、この事件を考えてみようと思います。

私は二〇一五年から「バングラデシュ経済成長下における若者の『移動』と文化形成」という科研プロジェクトを実施しています。バングラデシュの現在一〇代後半から二〇代の若者たちは、一九九〇年代以降の教育普及の中で、親世代にほとんど通学経験がない小学校に通い出したという意味での「教育第一世代」であると捉えています。

この「教育第一世代」をとりまく教育環境においては、数の上での広範囲な普及が見られる一方、質の格差は非常に大きく存在します。いわゆる英語でのエリート教育と、バングラデシュの場合はベンガル語が唯一の公用語です。メインとなるベンガル語での教育、そしてイスラームの教えを含むマドラサ教育。マドラサの中にもベンガル語の教育とコーランの教育を併せ持つ世俗型のマドラサと、コーランとアラビア語の教育に集中するマドラサとの二つのラインがあります。どの制度の下で教育を受けるかというのも大きな格差を形成しています。「教育第一世代」は、新自由主義的なグローバル化の中で進められる教育改革の恩恵と影響を強く受けているといえます。

もう一つ、この世代に言えることは、二〇〇〇年代以降の著しい都市化型の経済成長の労働者、特に縫製業などでの労働を担っている、それがマジョリテイの若者の状況ではないかと思えます。

もちろんエリート教育を受けている若者の中には、もう何世代にもわたって教育を受けた

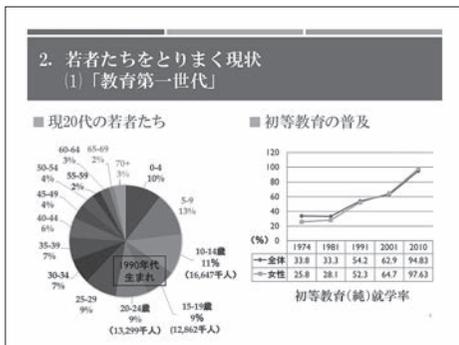
知識層が含まれていますし、これが全てでもありませんが、私が見ている特に農村部の若者たちは、こうした「教育第一世代」の若者たちです。

この科研プロジェクトの中で、八月から九月にかけて現地調査をしておりました。決して今回の事件に関して調査をしていたわけではありませんが、事件直後の若者たちの反応も踏まえて見てみたいと思います。

まず、「七・一事件」に対してのベンガル語での表現について、現地でよく聞かれたのが、「ジョンギ／ジョンギバート」という言葉です。それまで過激原理主義者などに対して使われていた「モノロバート」あるいはテロリズム／テロリストを表す「シヨントラシー」などという言葉とは異なり、あるいはムーブメントの「オンドロン／アンドロン」という言葉とも違う、「暴力性」を示す言葉として使われていたという点も、やはり今までの文脈とは異なるのではないかと思います。メディアや新聞などでも、これまでJMBと言われていたのがNeo JMBあるいはNew JMBという、今までの国内政治とは異なる文脈での捉え方がされてきたように思います。

若者の教育背景についてはあまり細かく説明すると時間がないので簡単に述べます。バングラデシュの一九九〇年代生まれの現在二〇代の若者たちは、日本と違って人口の多くを占める層です。私が「教育第一世代」と定義付けたこの世代は、先ほど申し上げたように、初等教育の普及の中で教育を受け出した世代であり、識字率などを見ると、現在の二四歳以下と以上で、かなりの差が見られます。

また初等教育後の中等教育の広がりも見られます。実際に中等教育を終えるのは三割程度ですが、学校に行く経験が一般化していると言えます。



1. 「テロ」認識
- ベンガル語による表現
 - মৌল / মৌলবাদ (Fundamentalist/Fundamentalism)
 - সন্ত্রাসী / সন্ত্রাসবাদ (Terror/Terrorism)
 - আন্দোলন (Movement)
 - জঙ্গী / জঙ্গিবাদ (Military, Militant / Militancy) ⇒ 暴力性
 - ⇒ イメージの変化
 - 国内政治的理解
 - 「JMB (Jama'atul Mujahideen Bangladesh)」から「Neo JMB」へ

高等教育についても、一九九二年に私立大学法ができて私立大学が増えると同時に、公立の大学も増え、高等教育機関数が右肩上がりに増えています。高等教育のシステムも非常に多様な状況にあります。表の一番上にある公立大学、私立大学が、いわゆる日本で想像するものに近い大学です。これに対して National University (国立大学) の下に被提携カレッジがあります。バン格拉デシユでは五年の初等教育、その後、中等教育が前期五年、後期二年、合わせて一二年で、その上が高等教育ですが、高等教育機関において特に二〇〇〇年以降数を増やしているのは、Degree College (教養カレッジ) あるいは Honors College (学部カレッジ) と呼ばれる農村を中心に増えているカレッジです。これは National University という一つの大学の被提携校として設けられている学校です。試験や学位を出す権限は全て National University に委ねられ、教育実践のみの教育機関です。

マドラサに関しても、高等教育課程のマドラサも増えています。これらのカレッジやマドラサに通う学生の層や様子については後ほど説明します。

高等教育の就学率を捉えるのは非常に困難です。困難な理由の一つは、「一応籍を置いている大学生」が非常に多いことにあります。一般には二四歳ぐらいまでの人口統計で今学校に行っているのが六〇―一〇%と出ています。

いわゆる公立・私立の大学 (University) と National University の下にある教養・学部カレッジの格差は非常に大きいと言えます。農村部に多い教養カレッジでは、授業は行われている前提になっていますが、実際には日常的にはほとんど行われていません。試験を受けて合格し、B.A. の学位を得るための勉強を自分でする、あるいはたまにカレッジに行つて試験対策を先生に教えてもらうといった形です。「高等教育の資格化」と言えるかと思いません。

B.A. の資格を持つということが確かな職に結び付くわけではないのですが、しかし学位

② 高等教育の多様な状況

■ システムの多様化

高等教育機関	運営	学校数	学生数		
			Pass	Honors	
公立大学 Public University	公立	34	0	316,331	
私立大学 Private University	私立	52	0	280,822	
国立大学 (1) National University	教養カレッジ Degree College	公立	93	39,308	0
	学部カレッジ Honors College	公立被補助	1079	264,484	0
	私立被補助	235	89,442	53,490	
	公立	76	146,834	409,739	
修士カレッジ Masters College	私立	47	12,629	46,197	
通信制大学 Open University	公立	1	243,928	1	
マドラサ Fazil		1054		624,549	

を持つていることが将来何らかの役に立つ、あるいは社会的なステータスに役立つという認識は、広く普及していると言えます。

マドラサに関しても農村を中心に増えていると言いましたが、マドラサでも教養カレッジと同じような状況が見られます。また、マドラサで学位を取る多くの若者たちの間ではカレッジとマドラサのダブルスクールで両方の学位も取っておくという状況が見られます。

農村部のカレッジやマドラサでの資格化する高等教育の状況は、いわゆる公立・私立の大学 (University) の、「キャンパスライフ」がはっきりしていて、教育を受けて、それを基にホワイトカラー職を目指すという、あるいはそこでのコミュニティを得るといふ大学生とは大きく異なります。そういう意味でも、「大学生」と一くくりにはできない状況が見られます。

農村から都市への移動に関しては、近年、地方都市からダッカの公立・私立の大学への進学が随分と増えていますが、農村で農業ベースの生活の中からの若者の大学 (University) への進学はかなり限られています。

そうした中で、農村の若者たちが都市に出る道において圧倒的に多いのが、就労都市移動です。ご存じのように、一九八〇年半ばからバングラデシュでは輸出型衣料品生産業（以下、縫製業）が始まり、とくに二〇〇〇年以降、急増しています。一九八〇年代の縫製業での労働者の平均年齢は二〇代半ばでした。二〇〇〇年以降の労働者の平均年齢も相変わらず二〇代半ば、二四歳前後です。つまり、そこで職を継続してステップアップするというよりは、若者たちが非熟練工として一時的に労働に従事し、それがグローバル経済の中では「豊富で安価な労働力」という位置付けで期待を集めている状況での、若者たちの都市移動が多く見られます。

就労者の学歴を見ると、学歴が上がるほど失業率が高いという状況が、一九八〇年代、一九九〇年代にも見られました。多少の改善はありますが、現在でも同様の状況が見られます。

農村出身の若者たちですが、村の大学生に関しては先ほど述べたように、ほとんど多くは「通学しない大学生」です。普段は都市で働き、試験のときのみ帰省して試験を受けるといふ若者たちが多く見られます。

女子に関しても、婚姻後もカレッジに籍を置いて自宅で勉強して試験を受けるといふ状況が見られます。あるいは村で働きながら通う。現在、農村で急激に広がりを見せているのが塾産業です。村で教育を受けた若者たちは塾の講師をしながら、そこで得たお金で自分も勉強するといふパターンが見られます。

つまり村の大学生は、大学生として生活しているというより、「チャンスを待つ求職者」として、そのために学位も準備しておく、取得しておくといふ状況が見られます。

次に都市と農村の往来に関して述べます。縫製業の労働では工場内での昇進昇給が限られているため、特に男子の多くは、一つの工場から少しでも条件のよい次の工場へと移ることによってステップアップしていきます。労働者にとって仕事は引く手数多にあるため一度辞めても次があるのです。異動の間に自主休假的に村に帰郷し、しばらく村でゆつくりするという形での往来も見られます。都市生活に定着していく若者たちもいますが、多くは将来村に帰ってくることを目指していると言います。

また、縫製業では労働者の七割方が女性であると言われています。そこで働く女性たちの多くもまた貧困層で、「農村から働きに出ざるを得ない層」というネガティブなイメージが

あります。

農村の若者たちの関心は明らかに、どうやって生きていくか、どうやって食べていくかということに尽きます。「教育第一世代」に見られる親世代との明らかな相違は、非農業志向という点です。そうした中で学歴を、手段あるいは目的として形成しているのです。

若者の政治に対する関心はどうでしょうか。経済活動が活発化してチャンスを求める中で、いわゆる村政治に対しての関心や参加は、前の世代に比べると希薄化している、都市に住む若年労働者層ではさら希薄化しているのではないかと見えています。

村の若者たちの間でもスマートフォンが普及していて、電話やSNSでつながる。そこで交わされる情報は、友達同士で「つながる」、あるいは外の人と「つながる」、写真を交換してみるなど、多分に日本の大学生と同じような状況が見られます。

宗教に関しては高田先生からもご報告がありましたが、村の若者たちや人々にとっての宗教は、明らかに日常実践としての宗教です。マドラサに進学する子どもたちが増えているのは全体としての教育の就学率が増えていることと比例しています。マドラサではベンガル語とアラビア語の両方が学べること、あるいはマドラサの方が若干試験に通りやすい状況が見られ、そうした中で村の若者たちがマドラサに行く。コオミマドラサというアラビア語のみを教えるマドラサでも、先ほど申し上げたように、ダブルスクールの状況が見られます。

なぜマドラサに行くのかと聞くと、多くの場合「ムンシ（イマーム）になれる」、親が「自分の子どもの一人はムンシにしたい」という、相変わらずそういう文脈で語られます。“The Land of Allah Jane”というフレーズがバングラデシュに関しての研究で出てきますが、日常生活の中で何かがあったときに「アッラーのみが知っている」と言う。イデオロギーと

いうよりは、日常実践として宗教が実践されているのです。

しかし、そのような文脈は確かに都市においては希薄化しています。日常生活における宗教的価値の希薄化への危惧としてのイデオロギー化が一部において起こっているということは言えるのかもしれませんが。

都市に出稼ぎに出る若者たちと、都市生活をしている若者たちとの間には、文化資本の差が大きく見られ、彼ら自身もそれを認識しているところです。

今回の七・一事件は、村の若者たちにとっても非常に大きな驚きであったと言えます。なぜ外国人が被害に遭ったかということに対して、高田先生の報告にもありましたが、非常に大きなショックを受けている。彼らの側には加害者が「同じ若者」であるという認識はほとんど見られません。出稼ぎにきて都市で生活している労働者層であっても、自分たちと同じ世代だという認識はほとんどありません。

事件直後にバンングラデシユ警察は、若者の管理に乗り出しました。一時的なものではありませんが、大学カレッジでの出席管理が強化され、学校に一〇日間来ていない若者は目を付けられるという状況がありました。しかし、先ほど述べたように、村の大学生の若者たちはほとんど学校に通っておらず、村で働いていた、あるいはダツカに働きに出ていたりします。都市と農村の間を行き来していたり、村でぶらぶらしていたりする若者たちもいますが、そういう若者たちが管理されリストアップされたのです。

村の若者たちは、「俺たちは明日どうやって食べていくかに必死なんだ。テロなんか企てる時間はない」と言います。しかし、自分の知らないところで自分の名前がリストアップされていることがあると、とても大きなショックを受けています。いつ警察が取り調べに来る

か分からないと怯えている若者もいました。そこには警察に対しての信頼のなさもあるのです。「警察は言われもなく取り締まり、それから逃れるためには賄賂が要るけれど、そんな賄賂は自分たちには払えない」と怯えている。あるいは、彼らにとっては既に経済活動の中でネットワークが非常に重要であるため、自分がそんなところにリストアップされると今後の就職に支障が出るとの心配を抱いている若者もいました。

今回の事件の容疑者の若者と村の若者たちは、「新世代」としての不安定な状況や外部からのイデオロギーとの接点という点においては共通性があるものの、状況においては明らかに乖離を捉えることができます。

農村と都市の間に生きる若者たちにとって、今回の事件にはこのようなギャップがあります。事件を起こした首謀者らが通っていた私立大学では、幅広い人文教育をしなければならぬ、あるいは学生組織をさせるべきだという議論になっているようですが、それは、もともとバングラデシユの農村社会にあった、ネットワークや関係が、都市化されることよって希薄になっていることに対しての、バングラデシユの懸念でもあるかと思えます。

時間が過ぎましたが、私の報告はこれで終わりにします。ありがとうございました。

(司会) ありがとうございます。それでは次に石山さんの担当をお願いします。

「家庭やコミュニティの視点から振り返るダッカ事件」

「実践型NGOが考える事件の背景と対策」

石山 民子（アジア砒素ネットワーク）

アジア砒素ネットワークの石山と申します。「家庭やコミュニティの視点から振り返るダッカ事件」実践型NGOが考える事件の背景と対策について」というテーマでお話しさせていただきます。私たちの現場での経験を基にお話するので、はじめに団体の活動などの話をさせていただきます。

アジア砒素ネットワークは、宮崎県高千穂町土呂久にあった砒素鉱山の公害に遭った人たちの被害者の裁判支援をしていたメンバーが、その経験とネットワークをアジアの砒素汚染地域に生かそうと、一九九四年に創設した団体です。ちょうどそのころ、アジアのさまざまな地域で飲料水の砒素汚染が問題になっていました。

バングラデシュもその一つで、一九七一年の独立以降、飲料水対策として導入された井戸に、自然由来の砒素が含まれていることが一九九三年に判明しました。その後の調査で、三五〇〇万人が砒素に暴露していることが分かり、その後飲料水対策は進みましたが、それでもまだ二〇〇〇万人以上の人が、安全な水を得られていないといわれています。

こちらの写真にある井戸も、たくさんの人の命と日常の暮らしを奪いました。

一つの集落で、働き手が長患いの末に亡くなっていく。そうなると、残された子どもたちはさまざまな困難に直面します。早婚（児童婚）、退学、家族の離散、孤児院への入所など

（特活）アジア砒素ネットワーク

1994年 宮崎県高千穂町土呂久の砒素鉱山の公害の裁判支援をしていたメンバーが創設



土呂久の自然豊かな風景



の状況に追い込まれます。

予防できる疾病から貧困化していく人々との出会いが、私たちの活動の原点にあります。

アジア砒素ネットワークは、当初、安全な水供給と、慢性砒素中毒症の治療支援といった砒素問題に限定した活動をしていました。慢性砒素中毒症とは砒素に汚染された水を飲み続けることで起こる病気ですが、皮膚症状から始まり、全身疾患、がんにつながっていきます。

しかし、さまざまな問題に直面します。安全な水供給においては、代替水源を作っても、短期間で不稼働になってしまう。水が枯れるなどの自然条件、技術的な問題、人間関係などもあつて、調査によると半分ぐらいは止まってしまふ状況になりました。

もう一つは、治療支援をせつかくしても、家に戻ると同じ状況になってしまう患者さんが多い。休養も取れないし、栄養改善もしない。そしてその地域に安全な水があつたとしても、砒素の入った水の利用に戻ってしまう状況もありました。

最初、多くの援助関係者が砒素は短期集中で解決できるのではないかと考えていたと思います。しかし、社会基盤の弱さと直結する問題であるが故に、持久戦を覚悟しないとイケないと感じました。そうなってきたときに、砒素だけを取り上げて継続していくのは困難だとも気づきました。住民の意識を継続させるのも難しいし、あとは行政側も、砒素対策を支えていく人材を確保し続けることがやはり難しいと。そうになると、現地の人にとっての受け入れやすさを重視していかなければいけないと考えるようになりました。

その中で、私たちも発想の転換を求められて、砒素があつても住民被害が出ない地域をつくっていくことが重要だと考えるようになりました。具体的に何かというと、安全な水供給を行政ができるようになること。

夢をあきらめなくてはならない子どもたち

一つの集落で、働き手が、長患いの末、亡くなっていく。

予防できる疾病から貧困化するストーリーに出会ったことが活動の原点。



早婚、退学、家族の離散、孤児院への入所

バングラデシュの飲料水問題



この井戸も、たくさんの命と日常の暮らしを奪った

1971年の独立以降、飲料水対策として導入された井戸に自然由来の砒素が含まれていることが1993年に判明。

3500万人が曝露。2000万人以上が安全な水を得られていない。

同時に、慢性疾患に対応できるよう保健分野のサービスを充実させていくことでした。そしてもう一つは、明日、来年のことだけでなくもっと長いスパン、「生涯を通じた健康の維持」の視点を持つことの重要性を家庭やコミュニティに働き掛け、その文脈で、飲料水に砒素が入っていることの恐ろしさを改めて訴えることにしたのです。

今もお話が出ていますが、バングラデシュでは、急速な発展があった中、経済発展の影でさまざまな人権侵害や環境破壊が起きたことは想像しやすいと思うのですが、実際は開発目標達成の影にも、さまざまな課題を残してきました。いくつか例をあげます。

一つ目は、感染症予防として普及・推奨した井戸（地下水）に砒素が入っていて、数十年後にはがん患者を生んでいたという、私たちがまさに取り組んできた課題です。

そして保健分野の対策は進んで、お母さんや赤ちゃんの死亡の数が減ったことは素晴らしい功績ですが、産後の女性の健康という点では今も大きな課題が残されています。もう少し母子保健分野で丁寧に対策がされたら避けられたはずの健康問題も今も残されたままになっています。

また、米の増産は成功し、三食摂れる人が増えたのは良いことですが、米に偏りすぎて野菜や豆などは逆に減り、栄養バランスを崩し、糖尿病やがん、心臓、脳血管などのような慢性疾患が二〇年間で七倍に増加しています。こうした慢性疾患がバングラデシュの死亡原因の六割を占めています。国が豊かになって高齢化していったら、それは当然だろうと考える方も多いと思います。しかし、単に高齢化の副産物とくくることができません。なぜなら実際、若年のうちから重症化や死亡にいたるケースが多いのです。たくさんのバングラデシュ人とお付き合いのある方の中には、三〇代、四〇代で心筋梗塞などで命を落とした人をご存知の方もいらっしゃるのではないかと思います。私たちは若いうちに重症化することを止め

砒素限定の活動から社会基盤全体の強化へ

持久戦を覚悟
ヒ素問題は短期集中で解決できるわけではなかった。ヒ素だけを取り上げて継続するのは困難

現地の人にとっての受け入れやすさ重視

発想の転換
砒素があっても住民被害が出ない地域づくり
→安全な水供給と保健分野の行政強化
→健康の視点から家庭とコミュニティへの働きかけ

安全な水供給



慢性ヒ素中毒症の治療支援



当初
砒素に限定した活動



様々な問題に直面

・不稼働になる水源
(自然条件、社会的問題)

・治療支援をしても、同じ状態に戻ってしまう患者
(休養も栄養改善もなし・砒素の入った水の利用)

るためには、三〇代、四〇代から対策を始めても遅いということに気付き、一〇代に介入することが必要だということを認識するようになりました。これを受けて、今年四月から、思春期の若者の栄養改善と健康増進のプログラムを開始していました。

こうしたことが今回話をさせていたことのバックグラウンドになっています。

七月一日のダッカ襲撃事件を迎え、まずはどういう人が事件を起こしたのか。得体のしれない、手の出しようのない事件なのかと最初は思ったのですが、徐々に実行犯の顔が見えるにつれ、印象が違ったものになりました。

二人ほど紹介したいと思います。

七月一日の事件の実行犯の一人であるミア・サミフ・ムバシル容疑者（一八歳）は、富裕層の出身で、肉親を殺された、などという過去を持っているわけでもなく、学業もよくできて、おとなしい、礼儀正しい、前途ある若者であったそうです。先ほどもお話があったとおり、親たちが、事件を起こしたことを全く受け入れられません。

もう一人は七月一日の事件の実行犯ではなく、その後の摘発作戦の中で殺された過激派の一人、シャトキラ県タラ郡の出身のマティア・ラーマン容疑者です。この地域も砒素の汚染がひどく、私たちもよく訪ねていたところですが、このタラ郡の貧しい家庭で生まれ、両親が離婚し、母親と一緒に転々として過ごしていました。事件の前は恐らく縫製工場で働いていたのだろうと言われています。こちらにも犯罪歴はなく、父親は非常に大きな衝撃を受けていたという話が出ていました。

発展の影で生れる新たな課題

開発目標の達成にも影が

- ・感染症予防で推奨した地下水から砒素→癌に
- ・母子保健対策は進んだが、産後の女性の健康は？
- ・米の増産は成功したが、栄養の偏り

糖尿病、癌、循環器病、慢性呼吸器疾患、ヒ素中毒症
環境と生活習慣に起因する慢性疾患 = NCDs
20年で7倍に増加！（死亡の6割）

若いうちに重症化→10代の介入が必要

今年4月から思春期の健康プログラムを開始

2016年7月1日 ダッカ襲撃事件

どうい人が事件を起こしたのだろう？
得体のしれない、手の出しようのない事件なのか？

今日お配りした資料の中に、「自分も（おそらく）テロリストになっていた」とタイトル
の手記があります。これは Dhaka Tribune 誌のインターネット版の Ahmed Muhammed 氏
の記事を、バンングラデシュと長く関わりのある安田千恵子さんが訳されたものです。要約す
ると、人間関係や勉強、学校のことであつ状態になつていた若かりし日の著者に、巧妙な手
口で声を掛けてくる過激派グループのリクルーターがおり、危うくその誘いについていきそ
うになります。しかし、家庭内の対話を通じて母親がその危険を察知し、適切な環境を整え
ることで過激派グループに入るのを食い止めることができたという内容です。

この記事を読んだときに、信頼して相談できる人間が一人でもいて、その人が宗教や社会
の動きをよく学んでいて、深い愛情を注ぎながらも冷静なアドバイスをくれるなら、リク
ルーターの誘いを退けることができるのかもしれないという、一つの希望のようなものが見
えました。

その後、人材育成やコミュニティ強化を行つてきた私たちのような実践型の NGO は、こ
れまでの活動の延長として、若い世代が過激派思想に洗脳・扇動されない環境づくりに協力
できるのではないかと考えるようになりました。

「若い世代の特徴」として、今までの活動の中で私たちが感じていた心配な点、気になつ
ていた点を幾つか紹介させていただきます。

まず、競争に勝つための勉強が中心で、成長期の子どもにふさわしい生活リズムが身に付
いていない。夕飯を食べると眠くなり勉強ができないという理由から夕飯は一〇時か十一時
まで食べさせない、という話をよく聞きます。同時に、食育に失敗している家庭が多く見ら
れ、食べるものと言えはお菓子や揚げ物くらいで、野菜は人生でほとんど食べたことがない

地方出身、貧しく、崩壊した家庭で育つた マティヤ・ラーマン容疑者（24歳）

- ・コランブールの摘発作戦（ストーム26作戦）の銃撃戦で殺された過激派の1人
- ・クルナ管区シャトキラタラ郡オマルプール村
- ・小さい時に両親が離婚し、母親と点々として過ごす
- ・ダッカの縫製工場で働いていたようだ
- ・犯罪歴なし
- ・父親は大きな衝撃

http://bddnews.com/post/20160729_7267/
<http://www.thedailystar.net/frontpage/motiar-came-poor-broken-family-1261024>

ミア・サミフ・ムバシール容疑者（18歳）

- ・7月1日事件の実行犯
- ・名門進学校を「優秀な成績」で卒業し、国内の私立大学に進学
- ・今年2月29日、ポップコーンを食べながら試験対策の授業
- ・父親の話：感受性が強く、友だちが多いタイプではなかった。過激派はそこに目を付けたのかもしれない。彼らが実際にどういふ言葉をかいたのか分からないが、本人の自信のなさや信仰心につけこんで仲間意識を植え付けたのだろう。
- ・遺体とはまだ対面する気持になれないと話し、「息子はその遺体の中にはいないと信じていた。まだ希望を持っている」

学業が良くできて、おとなしい。礼儀正しい子ども

<http://www.cnn.co.jp/world/35085371.html>

という子もいました。

それから、安全性の低い都市環境のためか、都市部の子どもは、子どもらしい遊びをしたことがない子が多いようです。階級社会でもあり、特に余裕のある家庭に育った男の子は、家庭や学校で掃除、洗濯、料理などの家事の経験をほとんど持ちません。NGOの現場から若い世代を見てみると、高等教育を受けていても実践力が弱いことが特徴です。こういったことの結果として、生活感をもって現場を洞察し、解決方法を考えることが総じて苦手で、現場の即戦力として期待できず、採用する側がちゅうちょする傾向がありました。

そして、やはりSNSの過激な情報がかなり出回っていて、ベンガル人の若い友達もFacebookなどで、ドキッとするような写真が流れてくることもありました。

また、海外で暮らす親戚や友人を持つ人が多いので、SNS等を使って海外とリアルタイムでつながっています。それによって、新しい情報を得て、洗練されていく面も優位性もありますし、逆に距離的に離れていても同胞が受けた悲しみ、怒り、憎しみもすぐに伝わるし、そうした純粋な気持ちを利用される危険もあるでしょう。今回の事件を聞いたときも、SNSを駆使して海外と日常的に通信している若者の姿が思い浮かびました。

今のバン格拉デシユの課題と可能性を大きくまとめてみます。

「課題」は、都市化や近代化、経済発展に伴って、生活スタイルが変化して起こるさまざまな弊害を防ぐために、既に他の地域で検証・確立されている知識や方法がバン格拉デシユには伝わっていないことです。

特徴的な例をあげると電気が普及すれば、夜の時間を使えるようになるため生活は夜型になりがちです。食事の時間を遅くすると肥満や糖尿病のリスクになるので、食事は早く済ませたほうが良いことを、ほとんどの日本人が知っていますが、バン格拉デシユの人は知らず

人材育成やコミュニティ強化を行ってきた実践型NGOは、これまでの活動の延長で、若い世代が過激派思想に洗脳・扇動されない環境づくりに協力できるのではないか？

I was a (almost) terrorist. 「自分も（おそらく）テロリストになっていた」

Dhaka Tribune紙 2016年7月16日付Ahmed Muhammed著 日本語訳：安田千恵子

- 人間関係、勉強、学校のことでうつ状態になっていた若者
- 自暴自棄になっている若者に、巧妙な口で声をかけてくる過激派グループのリクルーター
- 危うく誘いにのりそうになる若者の心の動き
- 母親がうまく介入したことでそれを食い止めることに成功

信頼し相談できる人間が一人でもいて、その人が宗教や社会の動きを良く学んでいて、深い愛情を注ぎながらも、冷静なアドバイスをくれるなら、リクルーターの誘いを退けられるかもしれない

に、夜一〇時、一一時にご飯を食べて一五分以内に寝ることが普通になっていました。このように、既に他の地域で確立されている知識が伝わっていないのは、大きな損失です。同様に、高度成長期の若者が抱える見えづらいつらいつら悩みにについても先進国が共有できる経験はあると思います。

「可能性」の方なのですが、社会の問題を解決するための課題と、あとは対応策が明確になったときに、コミュニティが非常によく機能します。それがミレニアム開発ゴール(MDGs)の成功にも間違いなく寄与していると感じました。バングラデシュがこれまで乗り越えてきた問題と同じように、今の問題を乗り越えられる可能性はあるのではないかと、個人的には感じています。

さてここで、AAN(アジア砒素ネットワーク)は、これまでどういう若者支援をしてきたのか。変わりゆく時代に生きる思春期の若者たちの支援の必要性に気付かされて、活動の中でさまざまな働き掛けをしてきているので、そのうちの幾つかをお話します。

一つは、一〇代の健康づくりの支援です。栄養バランス、生活リズムを整えることです。私たちの活動地域の中学生への調査で夕飯の時間について聞いたところ、八時前にご飯を済ませていると答えた中学生は、全体の二%程度でした。下の写真にあるように、一〇代の子どもたちと対話しながら、健康の重要性について気付きを促し、自分たちで今の問題に気付いて解決する能力を培っていく支援をしてきました。

二つ目は、自己有用感を抱けるような経験を増やすことです。若い人たちが、世話をされるだけの存在から、地域社会や大人たちの健康づくりにも貢献できる存在になってもらおう

バングラデシュの課題と可能性

課題

• 都市化・近代化・経済発展に伴って、生活スタイルが変化することで起こる様々な弊害。それを防ぐためにすでに他の地域で検証・確立された知識や方法が伝わっていない。

可能性

• 課題と対応策が明確になった時、コミュニティがよく機能する(MDGsの成功)

若い世代の特徴

これまでの活動の中で気になっていたこと

- 子どもたちの生活スタイルの乱れ(就寝時間・食事・運動)
- 都市部では安全性低く、子どもらしい遊びをする機会少ない。
- 富裕層の男子は特に家庭や学校での掃除・洗濯・料理の経験もない
- 高等教育を受けていても、英語による座学が中心で、実践が弱い。
- NGOの現場で採用しても、生活感をもって現場を洞察し、解決法を考え、実行することが苦手。
- SNSによる過激な情報。
- 海外へのあこがれ(海外に住む人との連帯感)

ことを目指しています。私たちは村の中での健康診断などをやっているのですが、その中で若い人たちに、健康診断、測定に加わってもらったり、あとは健康のリスクがあったときに、このまま放っておくとういうことになる」と説明してもらったり、手伝ってもらっていました。その後も継続的に、「おばさん、最近元気？」とか、「病院に行った？」という見守りをしてもらうことも、非常に重要なことだと思います。そのような世代を超えた交流や相互の助け合いなどにも取り組んでいます。

バン格拉デシユだけではなく、多くのアジアの国も今後介護負担も非常に大きくなるといわれているので、それを予防する意味でも、若い世代が年配の健康を支えていく、そして若い世代自身が学んでいくことも重要なことだと思っていました。

そして次は高等教育を受けた人の活躍の場をつくっていくことへの協力なのですが、高等教育が英語による座学が中心で、海外のテキストがそのまま使われ、そのままでは地元の問題解決に役立てることができないことがよくあるようです。

私たちは栄養学部の人たちと一緒に仕事をしているのですが、NGOの現場で見つけた課題に対して、どういったことが必要なかを考えて、一緒に実験をして、教材を作っていくという取り組みをしていました。社会に出たときに、自分たちでも楽しいと思えるような能力を習得していつてもらいたいと思いますし、そのことによってやりがいのある仕事、就労の機会が増えていくのではないかと思います。

最後ですが、地元の方で子どもたちを見守るということですが。こうした取り組みは、今までさまざまなグループ、ユースクラブなどがやっていました。勉強させたり、芸術に触れさせたり、そのようなことはもう地域の中で、普段からやられていたところですが。それに対し

1. 10代の健康づくり支援

大人になつてすぐに糖尿病や脳卒中にならないために

特に重視していること

- ・勉強以外の経験
- ・栄養バランス
- ・生活リズム

夕飯を8時前に済ませると答えたのは全体の2%

10代の子どもたちと対話しながら健康の重要さの気付きを促す



夕方集落の人と運動をする中学生



農村部中学生の食事や生活習慣について聞き取り

AANのこれまでの若者支援

変わりゆく時代に生きる思春期の支援の必要性に気付かされ、活動の中で様々な働きかけをしてきた

て、私たちの方も何らかのインプットをするということもしてきました。

ユースクラブの目的の一つとして、薬物に手を染めない、あとは破滅的な出会いに行かないなど、そういうことを目的としてやっているようです。

農村や地方都市ではそういうことは機能しやすいと思うのですが、やはり都会の方は孤立しやすいです。移動してきた人も多いですし、なかなか都市部で、若い人たちを見守っていくのは難しく課題となっています。

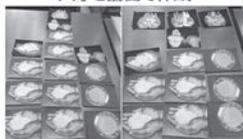
NGOにできることなのですが、今は経済成長や近代化で、暮らしが大きく変わっていく時代です。南出さんのお話にもありましたが、親の世代と比べて勉強にも集中できて、飢えもなく、一見すると恵まれている子どもたちですが、親たちが想像もつかないような不安や不自由さを味わっていることがあります。

思い返せば日本もそうでした。私たちの世代も高等教育の第一世代と言える世代だと思うのですが、子どもたちが非常に荒れた時代だったと思います。そういった経験も生かして、鬱屈した状態にならないように心身の健康を保つ、将来につながる良い出会いのチャンスをつくる、将来社会に貢献できるように必要な能力を付ける、このような環境づくりをしていくことがとても大事だと思います。NGOは直接、あるいはコミュニティを通して、あるいは大学や学校と連携しながら、こうした支援をしていくことができるのかなと、最近思っています。

先に述べたとおり、バングラデシュは、社会課題を乗り越えていくことを得意とするリーダーやネットワークが各地域に存在しています。今回の問題は、今のところ、警察や軍が管理を徹底すればよい、といった視点に偏ってしまっているのですが、今後はバングラデシュの強みを生かして、テロの問題も自分たちが参加して克服することをもっと考えていけるの

3. 高等教育を受けた人の活躍の場

地域に適した教材を
大学と協働で作成



バングラデシュ版食品単位表

思春期女子の栄養推進と健康改善事業（味の素助成）

高等教育が英語による座学中心で、地元の問題解決にそのままでは役立てることができない



食品中の発がん剤などを調査

2. 自己有用感を抱ける経験



ユースクラブのメンバーが主に高齢女性の健康診断



高齢女性疾患リスク低減事業（外務省助成）

世話をされるだけの存在から、大人たちの健康づくりにも貢献できる存在に

- ・説明ができる
- ・測定ができる
- ・見守りができる

世代を超えた交流
相互の助け合い

ではないかと思えます。

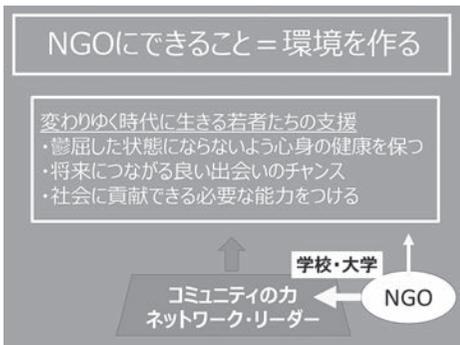
NGOとしては、テロ対策をやっていると看板を掲げる必要は全くなく、今までの活動の延長で、若い人たちが過激派からの誘いがあっても、冷静に判断できる力を付けていくことを支援すればよいと思えます。バングラデシュの社会の回復力の視点からも、この問題を見守っていくことが重要かなと思えます。

それと関連して、ソーシャルキャピタルを最大限生かせる、ベストコンディションで臨むためにも、現政権がやっている反体制派への行き過ぎた締め付けには、異を唱えたいです。

最後に、安全対策会議のお話を少しだけさせていただきたいと思えます。七月一日の事件を受けて、国際協力事業安全対策会議の最終報告者が八月三十一日に出されたのですが、その第一回の会議が九月三〇日にあり、バングラデシュで活動するNGOとしても方針を整理しました。

政府や企業が考える安全対策というのが、「防御」が中心であるのに対して、NGOの場合は、現地社会からの「受容」による安全対策を重視してきています。中立性や公正性を示して、活動を通じて信頼関係を築いていくことで、今までも活動してきていました。それによって、必要な安全情報を得られたり、何かのときにかばってもらえることも期待できます。また服装や使用言語によって、溶け込む努力、訓練もしてきています。私たちは現地に入って地域の人の生活を見て、その中で対策を考えることが仕事なので、自分たちがジロジロ見られて、身動きが取れないような状況になると仕事になりません。常日頃から外国人としての存在感を消す努力をしてきています。そういうことが安全対策にも生かされるといわれています。

ただし、NGOも「防御」もしています。特に、昨年一〇月に日本人が最初に殺害された



4. 地元力で子どもを見守る



さみしい夕方を過ごさせない地域の取組

農村や地方都市では機能しやすい

都会は孤立しやすい

学習、アート、料理、レク、運動などの場を提供
保健、収入向上、奨学金等、様々なプログラムを継続

とき以来、日本人の派遣も最低限に抑えてきています。車での移動の徹底や、仕事先や滞在先の安全強化、不要不急の外出を避けることなども、気を付けてやってきています。

私たちとしては、日本のNGOが関わることで防げたはずの貧困や格差を将来に残すことがないように、安全対策を強化しながら、できるだけ現場に近いところで活動を継続したいという方針は、各団体で共通したところとして示しています。以上です。ありがとうございます。

(司会) ありがとうございます。

それでは四人の発表者の最後、外川さんです。外川さんのご発表の後に、休憩を設けたいと思います。

NGOが考える安全対策

国際協力事業安全対策会議（9/30）に先駆けて
 Bangladesh で活動するNGOとして方針を整理

- 政府や企業が考える安全対策「防御」中心
- NGOは現地社会からの「受容」による安全対策を重視。中立性・公正性を示し、活動を通じて信頼関係を築くことで活動。服装や使用言語により溶け込む努力。
- 但し「防御」もしている。日本人派遣も必要最低限に。車移動、仕事場や滞在先の安全強化、不要不急の外出は控えるなど。

日本のNGOが関わることで防げたはずの貧困・格差を将来に残すことがないように、安全対策を強化しながら、現場にできるだけ近いところで活動を継続する方針

「ダッカの若者たちとテロ事件

―その歴史的背景を振り返る―

外川 昌彦（AA研）

それでは、「ダッカの若者たちとテロ事件―その歴史的背景を振り返る」というテーマで、お話しをさせていただきます。

冒頭の趣旨説明でも少しお話しをしましたが、今回の事件は、その背景をどこまでさかのぼって見るかということで、さまざまな見方ができると思います。

ここでは、過去三年ほどの治安の悪化などの近年の社会情勢の変化を、少し時間軸をさかのぼらせることで、一九七一年の独立戦争に至る流れや一九九一年の民主化以降の動向を背景において、少し長い目で、見直してゆけたらと思っています。

はじめに、過去約三年間の変化ですが、特に新聞等ではしばしば指摘されているのは、プロガーなどへの一連のテロ事件であり、それを通じた治安の悪化ということが、指摘されています。

この点については、資料に挙げている表一（64ページ）をご覧くださいただければ幸いです。本日の配布資料として、**Bloggers and Minorities Killing**と英語で出しているものです。

これは、バンングラデシユのメディアではさまざまに取り上げられています。プロガーの殺害に始まるその一連の事件の主なものを、表にまとめています。こういう形で、二〇一三年二月以降、いろいろな事件が起きている、ということが分かると思います。

特に二〇一三年二月というのは、シャハバグ運動と呼ばれるダッカの中心街での市民運動

1. プロガーへの連続殺害事件の背景

今回の事件は、どこまで遡って見るのかで、その捉え方も変わってくると思われる。しばしば指摘されたのは、過去3年程の治安悪化の状況、特にプロガーへの一連のテロ事件。Cf. 表一

シャハバグ運動で活躍し、その後、無神論者のリストにあげられたプロガーが狙い撃ちされる。その発端は、2013年2月のランブ・ハイダルの殺害事件。やがて、それは多様な言論人、宗教的マイリティやLGBT、外国人へと、その標的を拡大させる。

<国際戦争犯罪法廷の設置>

アフミ連盟党は、2008年の選挙公約に従い、1971年の独立戦争でパキスタン軍に協力し、多数の犠牲者生んだ戦争犯罪者を裁く、国際戦争犯罪法廷を設置、戦犯容疑者が次々に逮捕される。

野党は、この裁判を、イスラーム政党の弱体化を狙った司法の政治利用だと非難する。実際に法廷で裁かれたのは、多くがジャーアテ・イスラミー党（JI党）の幹部。最初の訴追では、9名のJI幹部と2名のBNP幹部。



が展開され、メディアの注目を集めた時期に当たります。

この市民運動が全国的に展開し、広く知られるようになる中で、この運動のオピニオンリーダーの一人で、ブロガーとしてインターネットで広く発言を行っていたラジブ・ハイダルさんへの殺害事件が起きました。このシャハバグ運動のブロガーへの殺害事件を発端として、その後、ブロガーや宗教的マイノリティなどのさまざまな人物を狙った、一連の殺害事件が続きました。

実際に、このブロガーを標的とした殺害事件は、その後、ヒンドゥー教徒や仏教徒、アフマディア教団、そしてLGBTの人たちなどの社会的マイノリティへと、そのターゲットを広げてゆきます。そのため、このブロガー殺害事件の延長に、今回のダッカでのテロ事件を位置付けることができるというのが、現地のメディアなどでは、しばしば指摘される見方です。

バングラデシュは、人口の約九〇%がイスラーム教徒ですが、その他に、人口の約九%のヒンドゥー教徒や〇・六%くらいの仏教徒などが住んでいます。そのため、ベンガル人のムスリム社会から見ること、このような宗教的・社会的なマイノリティの人々がターゲットにされ、事件に巻き込まれていることが指摘されます。

ただ、そのリストを見てゆくと、その他にも、シーア派の人々へのテロ事件も起きており、バングラデシュではこれは衝撃的な出来事として報じられました。シーア派はスンナ派と同じムスリムであり、これまでのバングラデシュでは、両者に顕著な宗派的な対立は見られず、また、シーア派の人たちが、このような襲撃事件の対象となったことは、ほとんど知られていませんでした。そのため、単純なムスリム対マイノリティという図式だけでなく、その背後には、ISILなどの国際的なテロ組織の影響が、取りざたされるようになりました。

<シャハバグ市民運動の高まり>

ところが、2013年2月のカデル・モッラに対する判決が軽すぎると抗議する人々が、若者のブログを通してダッカの中心街シャハバグ交差点に集まり、女性や子供も参加する国民的な運動に発展。10万人以上の人がこの周辺に溢れ、集会や演説、デモが組織される。



先ほども触れたように、二〇一五年一〇月には、バングラデシュ北部のロングプルで、日本人の星さんが事件に巻き込まれ、親日的な国として知られたバングラデシュで日本人が犠牲となったことで、大きく報じられました。その前の九月のダッカでは、イタリア人も殺害されているので、ちょうど二〇一五年の秋ごろから、日本人やイタリア人などの外国人もまた、これらの襲撃事件に含まれるようになったとされます。

こういう形で、テロ事件の標的の範囲が広がってゆくことで、それが今回のような、外国人が利用する高級レストランへの襲撃事件へと、発展していったという見方が、多くのメディアでは指摘されています。

ところで、先ほども少しお話しをした、国際戦争犯罪法廷の問題ですが、実は現政権のアワミ連盟党が二〇〇九年から始めたこの戦争犯罪法廷以後の様々な社会不安が、プロガーへの殺害事件などの一連のテロ事件の、背景にあることが指摘されています。

国際戦争犯罪法廷は、一九七一年の独立戦争での、パキスタン軍に協力した戦争犯罪者に対する特別法廷として設置されました。特に、イスラームの危機を唱えて組織的な虐殺に加担したとされる、J I 党などのイスラーム団体の指導者への訴追が続けられています。

一九七一年のバングラデシュの独立戦争では、独立運動家やヒンドゥー教徒、女性に対する暴力が組織的に行われ、公称では三〇〇万人の戦争犠牲者や一〇〇〇万人の難民とも言われる、多数の犠牲者を生みました。西パキスタンとの独立戦争では、東パキスタン内部にも独立運動に反対する人々があり、特にイスラーム政党の関係者が統一されたパキスタンを維持しようとして、パキスタン軍に協力し、これらの虐殺事件に関わったとされます。

しかし、四五年以上も前の独立戦争での出来事について、今になって裁判が行われ、それも二〇〇一年にはBNP党とも連立政権を組織するれっきとした公党であるジャマアテ・

イスラミー党（JI党）の指導者たちが次々と逮捕・訴追されることで、それは大きな政治争点となりました。

それは政権による司法の政治利用であり、特にイスラーム政党の弱体化を狙ったものだという批判が、野党からなされました。

ところで、この国際戦争犯罪法廷で訴追された容疑者への判決が出されるのは二〇一三年一月からですが、二月に判決が出されたアブドゥル・カデル・モッラへの判決に対して、市民の間で抗議の声があがります。カデル・モッラに対する判決は終身刑でしたが、それでは量刑が軽過ぎる、もつと厳しい罰を与えるべきだ、という声がインターネットやSNSを通して、人々の間で大きく広まりました。

はじめは、若者のブロガーがオピニオン・リーダーとなって声を上げ、そこにいろいろな人たちが呼応することで、ダッカ市の中心街のシャハバグという交差点に集まることで、大規模な集会が開かれました。

これが、シャハバグ運動と呼ばれる市民運動です。独立戦争の時にはまだ生まれていなかった若い世代が担い手となって広がった運動ということで、メディアでも大きく取り上げられました。最終的には、シャハバグ交差点の集会には二〇万人とも言われる市民が集まる大きな運動に発展し、バングラデシュの地方都市にも、その運動が広がりました。

そして、このシャハバグ運動が、その後のブロガーへの殺害事件などの治安の悪化、政府による統制の強化とイスラーム政党の弱体化、地下に潜った急進的な活動が過激化するなどの、一連の動きに続きました。

もともとシャハバグ運動は、イスラームの名の下で行われた戦争犯罪を糾弾し、世俗主義

<ブロガー殺害事件>

しかし、これをイスラームへの脅威と捉えた宗教政党や神学校などのイスラーム主義勢力は、この運動を「無神論者」と非難し、対抗する運動を組織。こうして、世俗主義的なナショナリズム運動とイスラーム主義運動の対立が国民的な争点となり、対立を深める。その中で、シャハバグ運動のブロガーで無神論者のリストにあげられた若者が狙い撃ちされる。

二大政党の政権交代から、2014年1月には、アワミ政権の継続へ。しかし、なぜ、45年以上前の出来事である独立戦争での戦争犯罪者が、現在のバングラデシュで国民的な争点となるのか。市民による自発的な運動が、なぜ、国政選挙やブロガー事件など、現代の政治状況をも左右するのか。

この問題は、歴史を遡って見る必要がある。



2. 今日の戦争犯罪者問題 Cf.表-2

<1990年代の争点>

イスラーム急進主義が注目を集めた事件として、日本で良く知られているのは、1993年のタスリマ・ナスリン事件

『恥』(ロジャ)は、バングラデシュで差別を受ける宗教的マイノリティのヒンドゥー教徒に取材した小説。その記述やコーランへの発言などからイスラーム神学者が死刑を宣告、翌年には政府の逮捕令状が出され、国外に避難する。

バングラデシュ国内では、ゴラム・アジムの市民権問題が、この時期の最大の争点。1991年に一定の議席を確保したJI党は、ゴラム・アジムを党首に選出。しかし、東パキスタン川の総裁として、独立戦争中の大量虐殺を招いた、和平委員会や民兵団の組織など、戦争犯罪の責任が問われる。市民法廷による死刑判決、政府による逮捕、市民権の認定問題などが、争点となる。

イスラームと対立するとされる知識人のリストが公表され、脅迫が繰り返されるのは、この頃から。

的な市民による、公正な裁判を求める運動として始まりました。

しかし、それに対して、すぐにイスラーム主義勢力による、さまざまな対抗運動が組織されてゆきます。イスラームの理念に従って社会改革運動を組織しようとするイスラーム主義運動は、実際には、英領期のイスラーム復興運動にはじまり、ザミンダール（大土地所有者）に対する農民暴動という背景を持つなど、歴史的にもさまざまな形が見られます。

現代のバングラデシユの、いわゆるイスラーム主義運動も、政治目標の実現を綱領に掲げるイスラーム政党による政治運動や、歴史的にさまざまな系列関係を持つ各地のマドラサ神学校に属する教師（フジュール）や学生が組織する啓蒙運動、ムスリム民衆の精神的な拠り所となる神学者（ウラマー）やスーフィー聖者（ピール）が組織する民衆運動など、その内実にはさまざまな内容が含まれています。実際には、それらがさまざまに離合集散を行いながら、イスラーム主義運動は組織されてゆきます。

特に、今回のシャハバグ市民運動に対しては、チッタゴンのマドラサ神学校の指導者を中心に、「イスラームを守護する運動」（フエファジョテイ・イスラーム）を名乗り、ダッカの市民運動に対する対抗運動として組織されました。シャハバグ運動を、墮落した無神論者の集まりであると非難し、農村地帯を背景としたチッタゴンから首都ダッカの目抜き通りの交差点、シャプラ・チョットルまでの長い行進を組織し、ムスリム農民を中心とした五〇万人とも言われる支持者を動員しました。

そのイスラームを擁護しようとする運動を、シャハバグ運動のプロガーたちは、イスラームの原理主義であると批判することで、互いに対立を繰り返してゆきました。そのような中で、シャハバグ運動を立ち上げた若者のプロガーが、テロの標的となりました。

ところで、一九九一年の民主化以降、バングラデシユではアワミ連盟党とBNPの二つの

政党が、順番に政権交代を繰り返しています。

それは、選挙による民主的な政権交代という意味では、一定の評価がなされますが、しかし、それ以上に、二大政党の対立が激化して、その弊害の大きさが指摘されるようになりました。たとえば、選挙で敗北した政党が国会には現れずに政府批判に終始し、政権については五年間の任期中はただ既得権の確保に腐心するなど、それが政策の非継続性や汚職の蔓延の温床となっていることが指摘されています。

バン格拉デシュでは、ストライキ（ホツタル）が頻発し、行政が停滞する状況がしばしば見られ、ダッカの駐在員の方が、ストライキが年中行事のようになっていると、よくこぼしたりしていますが、それもまた二大政党の妥協のない対立が、その背景には指摘されています。

ところで、シャハバグ運動が起きた二〇一三年は、アワミ連盟政権の五年目に当たる選挙の年だったのですが、現政権は、この時のシャハバグ運動の一連の動きを、野党対策のひとつとすることで、その後の二〇一四年一月の国会選挙を乗り切ってゆきます。選挙管理内閣を設けずに、最大野党のBNPが抗議のポイコットをする中で、アワミ連盟党は議会での過半数を確保します。

その経緯には、さまざまな政治過程が見られますが、シャハバグ運動とイスラーム主義者の対抗運動という図式がアワミ連盟の野党対策に有利に働いたことは明らかで、そこには、バン格拉デシュの宗教と政治との歴史的な関係を見ることができます。

たとえば、バン格拉デシュのイスラーム政党は、国会議席ではマイノリティ政党ですが、二〇〇一年にはイスラーム政党が連立政権を組み、閣僚も出すなど、宗教政党としての一定の支持基盤を持っていました。野党第一党のBNP党にとっては、そのJI党と選挙協力を行い、小選挙区制度のもとで、キャスティング・ボードを握る宗教政党の手強い票を確保す

ることは、次の政権交代に向けた、重要な選挙戦略になっていました。

しかし、国際戦争犯罪法廷によるJ I党（ジャマーアテ・イスラミー党）の指導者への逮捕や、宗教政党への統制の強化で、J I党の組織的な活動はほとんど壊滅状態となります。

結果的にこれまで、選挙のたびに二つの政党が交互に入れ替わり、政権交代を行ってきたバングラデシュで、今回、一九九一年の民主化以降で初めて、同じ政権が二期続けて政権を維持することになりました。それが現在のアワミ連盟政権の強固な基盤につながってゆきます。

このような現在の状況を整理するために、ここでは歴史をもう少しさかのぼり、バングラデシュにおける宗教と政治の問題を、その背景に見てゆけたらと思います。

独立戦争を直接には経験したことの無い若者の世代のプロガーが、戦争犯罪者に処罰を求めるシャハバグ運動を呼びかけてゆく事など、四五年も前の過去の独立戦争の問題が、なぜ、改めて人々の間で議論され、また、それが結果として、プロガーの若者への殺害事件などを引き起こしてゆくのかという問題を考えるためには、やはりもう少しバングラデシュの歴史的な背景を、見てゆく必要があるのではと考えるからです。

そこでご覧いただきたいのが、先ほどの表の次にあげている表二（65ページ）です。

ここでは、バングラデシュの国内の、イスラーム急進主義勢力が起こしたさまざまな事件として知られているものを、一九八〇年代終わりごろからの動きとして、主なものを取り上げて、まとめています。

この中で、当時、日本でもよく報道されたものとして、ご存じの方も多いと思いますが、一九九三年のタスリマ・ナスリン事件があります。

一九九三年に、女性小説家タスリマ・ナスリンが、『恥（ロツジャ）』という小説を公表しますが、それがイスラームの神学者等によってイスラームに対する冒とくであるとして非難され、その言動からタスリマ・ナスリンには死刑の宣告なされ、国外に避難するという事件になりました。当時の日本でも、この事件はいろいろと報道されました。

この小説は、一九九二年にインドのアヨーディアで起きた宗派暴動の余波を受けたバングラデシュの国内のヒンドゥー教徒の家族を題材に描いたものです。宗教的マイノリティの人たちがバングラデシュで体験するさまざまな差別や抑圧の状況が、物語の大きな背景を与えています。

ある意味では、バングラデシュのムスリム社会からの内部告発をしているという面もあり、それがイスラームという宗教に結び付けられて語られることで、大きな論争となりました。イスラームの保守勢力による批判を受けて、当時の政権（BNP）は、タスリマ・ナスリンへの逮捕状も出し、長らく国外に避難を余儀なくされて、母国に帰ってくることができなくなりました。

ところで、この時期、もうひとつ、バングラデシュ国内でさまざまに議論されたのは、ゴラム・アジヨムの帰国・政治的復権の問題でした。

このゴラム・アジヨムは、先ほども出ましたジャマアテ・イスラミー党（JI党）の指導者で、パキスタン時代から東パキスタンJI党首として、独立戦争を弾圧する運動に関わっていった人物です。JI党を代表する指導者でしたが、バングラデシュの独立とともに国外に亡命し、パキスタン政府のパスポートを所持し、しばらくはバングラデシュの独立に反対する活動をしていました。ジア政権によるイスラームへの融和政策などを経て、バングラデシュに帰還し、徐々に復権を果たしてゆきます。

その後、一九九一年の民主化後の初めての選挙では、J I党（ジャマーアテ・イスラミー）は、一八人の議員を当選させ、二名の女性議席留保枠を確保すると、与党BNP党に閣外協力をを行います。マイノリティ政党ですが宗教政党として一定の議員を出すことで地歩を固め、その後、ゴラム・アジヨムは正式に党代表に返り咲くこととなります。

しかし、国民の間では、ゴラム・アジヨムの政治活動への復帰に反対して、それを批判するさまざまな意見が出されます。BNP政権への宗教政党の閣外協力など、イスラーム政党による政治活動の是非をめぐり、さまざまな論争や事件が起きました。ゴラム・アジヨムは、その象徴的な存在となりました。

バングラデシユの西パキスタンからの独立は、東西に三千キロも離れた両翼国家の間で、その東西の経済的・政治的な格差や不平等に対する人々のさまざまな不満が、バングラデシユの独立を導くひとつの理由となっていました。

しかし、東パキスタンの人々の中にもその枠組みを維持したい、一九四七年にインドから分離独立した時の、イスラームの理念に基づく国家を保持したいという人々も、少数ですが見られました。実際に、ゴラム・アジヨムらのJ I党などのイスラーム政党やイスラーム神学校の関係者の一部は、独立戦争が始まると、バングラデシユの独立に反対し、パキスタン軍の軍事作戦に、協力するようになります。

こうして勃発した、独立戦争の九か月間は、都市部を拠点としたパキスタン軍が軍事的には制圧していたので、その間に多数のベンガル人の独立運動家が殺害され、宗教的マイノリティであるヒンドゥー教徒が襲われ、女性に対する暴力が行われました。

今回の国際戦争犯罪法廷で問われている問題もまた、イスラーム政党の指導者らが、この時にパキスタン軍に情報を提供し、あるいはラジャカルと呼ばれる私兵部隊を組織すること

で、独立運動家やヒンドゥー教徒への弾圧に加担してゆくという経緯です。

バングラデシユの国内には、まだ独立戦争時の犠牲者の家族も多く、その出来事を生々しく覚えていた人々もたくさん残されています。

バングラデシユは、一九七一年にはイスラームによらず、世俗的なベンガル人ナショナリズムに基づいて独立を果たしますが、宗教を理由として多くの犠牲者が生まれたことも踏まえて、独立後のバングラデシユ憲法は、ナショナリズム、民主主義、社会主義とならんで、その四つの国家原則のひとつとして、セキュラリズムを掲げます。

そのため、宗教政党の活動は、独立当初のバングラデシユでは認められていませんでした。しかし、その後の時の政権による、イスラーム勢力を政権基盤に組み込もうとするさまざまなおイスラームへの融和政策から、憲法のセキュラリズム原則は撤廃され、徐々にその規制は緩められてゆきました。

しかし、パキスタン時代のように、イスラーム政党が政治のメイン・ストリームに復活してゆくことに、納得のいかない市民も多くなりました。

このような状況は、参考文献にもあげた佐藤宏先生の論考（「バングラデシユ政治とイスラム」『バングラデシユ…低開発の政治構造』佐藤宏編、一九九〇年）などが詳しく、日本語でも様々に紹介されているので、ご参照を頂ければ幸いです。

ともかく、こうして、ゴラム・アジヨムらのイスラーム政党が政治的に復活してゆく過程で、それを問題とし、それを戦争犯罪者として糾弾する運動が知識人の間で起きてゆきます。独立戦争で多くの犠牲を生んだイスラーム指導者の戦争犯罪への総括が済んでいないと考える、ジャーナリストや大学教授などの知識人が声をあげました。

それが、表二では二行目に出ている『一九七一年の独立戦争での裏切り者は何処へ』

知識人を標的とした脅迫は、イスラーム主義団体が公開する「背教者のリスト」(Murtad Tarika)が知られる。言論界で影響力を持つ人物をリストアップし、攻撃するという手法。シャムシュル・ラフマンやフマユン・アザドへの脅迫・襲撃が起きる。

興味深いのは、このMurtad Tarikaは、ゴラム・アジヨムらの戦争犯罪者を糾弾する、『1971年の独立戦争の敵対者』(Ekattorer Ghatak o Dalal, 1987-89)に対抗する、イスラームを擁護する運動の中で生み出されたこと。84名のプロガー・リストに始まる今回の連続テロ事件にも、同様の経緯が指摘される。

ここから、戦争犯罪の問題やシャハバグ市民運動が、今になって、突然に始まった訳ではないことが分かる。たとえば、戦争犯罪法廷で罪を問われたゴラム・アジヨムは、1992年の市民法廷などでその罪が問題とされながら、その後も党首としてJIを率いるなど、当時の問題が決着されずに、今日に続くもの。

独立戦争での宗教と政治の問題が、なお国民的な総括がなされず、今も人々の意識に影響を与え、イスラーム政党の政治参加や世俗主義をめぐる今日の政治的争点として、問われていることを示す。

(Ekattorer Ghatrak o Dalal Ke Khoṭae) という冊子です。この冊子は、様々な編集がなされながら、いまでも広く読まれています。ここでは、独立戦争の混乱の中でどのような事件が起きたのか、バングラデシユの独立戦争に反対する人々がパキスタン軍に協力して、どのような事件に関与したのかを、詳しく報告しています。

その中で、大量の犠牲者生んだ戦争犯罪者として糾弾される人物の多くが、ゴラム・アジヨムをはじめとしたイスラーム政党の幹部たちでした。

ところで、このような戦争犯罪者を批判する運動に対応する形で、こんどはイスラーム政党やイスラーム知識人の側からの、それに対抗する運動が起きてゆきます。

その運動は、表二にもあげている、「背教者の宣言リスト」(ムルタッド・ゴシヨナ・タリカ)が知られています。これは、イスラームの教えに背き、その教えを冒瀆したとされる人物を、背教者(ムルタッド)であると宣告し、その「背教者」の名前を公開したものです。

実際にはこれは、さまざまな時期にイスラーム団体がその宣言を行い、流布されたので、そのリストにはさまざまな異同が見られます。しかし、多くの場合、ここで名前があげられているのは、独立後のバングラデシユを代表する文学者シャムシユル・ラフマンやダツカ大学教授アフマド・シヨリフ、原理主義を批判した作家のフマユン・アザドやジャハナラ・イマームなど、特に戦争犯罪者を告発した、言論界で影響力を持つ、作家や知識人、大学教授などでした。これらの知識人によって、先ほどの『独立戦争の裏切り者』の冊子も、編集されています。

『恥』の作者タスリマ・ナスリンもまた、イスラーム主義の行き過ぎに対するマイノリティや女性の権利を擁護する発言を行いました。イスラーム神学者によって背教者のリストに加えられ、死刑を宣言され、イスラーム団体から脅迫を受けることで、国外に避難すること

になりました。

パキスタン軍に協力したイスラーム政党が徐々に政治活動復帰してゆく中で、それを懸念するリベラルな知識人やジャーナリストが反対の声を上げます。しかし同時に、それに対抗する形で、イスラーム主義団体によって、これらの知識人がイスラームを冒瀆する背教者であると宣言され、それを非難する運動が起きてゆきます。

その双方の対立が、やがて宗教と政治をめぐる二極化した政治構造を生み、その対立の激化からテロ事件が派生してゆきます。この表にもあるように、シャムスル・ラフマンさんも、フマウン・アザドさんも、その後、テロの襲撃を受けることになります。

私は、このような世俗主義とイスラーム主義との歴史的な対立の構図を、バングラデシュの二極政治の構造と呼んでいます。その図式は、ちょうど今回のシャハバグ市民運動とイスラーム主義運動の対立図式にも、あてはめて見ることができると思います。

戦争犯罪者を批判するシャハバグ市民運動が組織されると、それを無神論者として非難する対抗運動が組織され、イスラーム主義団体による八四名のプロガーのリストが公開されます。それは、先ほども述べたように、プロガーの若者ラジブ・ハイダルへの殺害など、二〇一三年二月以降の一連のテロ事件につながります。

言い換えると、現政権による国際戦争犯罪者法廷での戦争犯罪者の問題は、実は今になって突然に始まった問題というより、このような二極化した歴史的な構図の中から見てゆくことができるのではと考えています。

一九九二年に、人民裁判という形ですが、有罪とされたゴラム・アジヨムは、それにもかかわらず、その後、JI党の党首として復権し、その後も政治的な影響力を持ち続けました。そのため、今回の国際戦争犯罪法廷でも、ゴラム・アジヨムは被疑者の中心的な存在として

注目を集め、二〇一三年七月には裁判官が全員一致で、死刑が相当という判決が下されます。ただし、この時には、九〇歳という高齢が考慮されることで減刑され、実際には九〇年の禁固刑が言い渡されました。

この国際戦争犯罪法廷のように、一九七一年の独立戦争での宗教と政治の問題が、今日のバングラデシュではなお、国民的な争点として議論され、今も人々に影響を与えていることが分かります。言い換えると、イスラーム政党の政治参加の問題など、宗教と政治をめぐる問題が総括されずに現在に至っていることが、このような問題が繰り返し問われてゆく、ひとつの背景を与えているとも言えると思います。

それでは、先ほどの表二に戻って、見てゆきたいと思います。

次の転機は、二〇〇〇年代以降の、公共の場でのテロ事件の発生の拡大に見ることができます。そのきっかけの一つは、一九九八年のいわゆるブラフマンバリーヤ事件です。当時、プロシッカというNGO団体が全国的な規模で活動を展開して知られていましたが、このプロシッカがブラフマンバリーヤ県で主催した記念式典に対して、地元のマドラサ神学校の教師や学生たちが暴徒となって襲撃する、という事件がおきました。

プロシッカは、人権を尊重するリベラルなNGOとして知られ、マイクロクレジットなどの社会開発を実践していましたが、それと合わせて教育にも力を入れ、農村部の人々の中に入って、識字教育や公衆衛生、女性のエンパワーメントなど、さまざまな啓発活動を行いました。

ところで、女性のエンパワーメントなどの啓発活動は、ある意味では既存の社会関係に微妙な変化をもたらします。この問題については、特に人類学者の *Lamia Karim* さんの研究が良く知られています。マイクロクレジットや社会開発プログラムによって女性の自立が進むなど、地域社会の社会関係が変わってゆくことは、既存の伝統的な権威構造に対してさ

<1998年以降の標的の拡大>

2000年代以降、公共の場でのベンガル文化に関わる活動や西洋文化へのテロ攻撃が頻発。その発端は、1998年のNGO団体プロシッカへのマドラサ関係者による襲撃事件に遡る。NGOの拡大が、西洋のキリスト教徒の陰謀として疑われた[外川 2014]。

その後、1999年に文化芸術団体・ウディチへの襲撃事件、2001年にロムナ公園での新年祭への爆弾テロ、2002年には映画館への連続爆弾テロで21名が死亡。

2001年のベンガル暦の新年祭では、タゴールの作詞・作曲によるタゴール・ソングを演奏する。主催は、パキスタン時代のウルドゥー語化政策に抵抗して、ベンガル語文化を守る運動をつづけたチャヤト。国民的な行事であるこの新年の式典は、生中継で全国に放映された。その式典に対する爆弾テロは、象徴的な意味を持つ。

2004年には、売れっ子作家でダッカ大学教授フマюн・アザドがテロ攻撃を受ける。イスラーム原理主義を強く批判する知識人として知られる。

さまざまな影響を及ぼす可能性があり、特に農村部の親族組織を代表する家父長や伝統的な宗教規範を代弁するマドラサ学校の教師など、地域の権威構造を代表してきた人々の間にNGOの活動に対する疑念が高まり、対立が生まれたことが指摘されています。

このブラフマンバリヤ事件は、ちょうどグラミン・バンクの活動がメディアで大きく取り上げられるなど、NGO団体のさまざまな活動が、広くバングラデシュの農村部に浸透してゆく時期におきました。もちろん、多くの人々は、NGOの活動がもたらす多様な恩恵を歓迎し、さまざまな活動が地域社会に受け入れられてゆくのですが、同時にそれが地域社会の社会関係に様々な影響を及ぼすことで、既存の権威体制には脅威と映ることで、疑いの目を向けられることもありました。

たとえば、グラミン・バンクなどのマイクロクレジットは、人々を借金に縛り付けて、植民地時代のように人々を隷属させようとする先進国のたくらみであり、バングラデシュにキリスト教を広めようとする西洋の手先として、こうしたNGOの活動家は送り込まれているのだ、といった言説がまことしやかに語られたりしました。

このような状況が、最終的には、NGOの活動への村人の疑念を高め、この時の襲撃事件につながったと考えられています。

ところで、その因果関係はなお不明な点が多いのですが、このブラフマンアリア事件以降、公共の場での、イスラームの急進主義的な団体によるテロ事件が、頻発するようになります。たとえば、一九九九年には、ウディチというベンガルの民族音楽や芸術を振興する団体が主催した行事に爆弾が仕掛けられ、一七名が死亡しました。続いて衝撃を与えた事件は、二〇〇一年四月のロムナ公園で開かれた春の祭典(Baishakhi Mela)での爆弾テロ事件でした。この祭典は、ベンガル暦の新年に当たり、ベンガル人にとってはお正月にあたる大切な行事で

すが、タゴール・ソングが演奏されている会場に爆弾が仕掛けられ、一〇名が死亡しました。

そして、翌二〇〇二年には、映画館への連続テロ事件が起きました。この時には、バンガラデシユの地方都市サトキラの映画館で三名、モイモンシンの映画館で二一名が亡くなっています。洋画を上映する映画館への爆弾テロということで、その背景には、西洋文化の浸透に対するイスラーム過激主義者の反発があったとされています。

このように、この時期に増えてゆくテロ事件は、さまざまな行事や団体を標的としていますが、そこにはイスラーム急進主義者から見た、反イスラーム的と見なされる文化や団体に對する敵意という共通した特徴を指摘することができます。

たとえば、ロムナ公演の春の祭典では、この行事を主催していたのは、タゴール・ソングを振興するチャヤノトという団体でした。この団体は、パキスタン時代のウルドゥー語化政策に抵抗して、ベンガル語の文化やベンガル語の音楽を守る運動を行い、バンガラデシユの独立運動の先駆けとなる国語運動で、大きな役割を果たした団体です。特に、ベンガル人にとつての国民的なシンボルとなる、タゴール・ソング (Rabindra Sangeet、ロビンドロ・シヨングト) の普及、教育、演奏を行っている団体として、知られています。イスラーム急進勢力は、まさにこのような団体を標的とした訳です。

ベンガルの文学伝統を代表するタゴールや、あるいはベンガルのお正月は、ヒンドゥー教やムスリムにかかわらず、ベンガル語を母語とする人々にとつての、共通の文化的基盤を与えています。宗教とは別のところで、人々に拠り所を与え、地域や階層、宗教などのコミュニケーションの違いを超えて、人々が集まることができます。それはバンガラデシユの国民統合の理念として憲法にも盛り込まれているものですが、それがイスラーム急進主義勢力にとつては、テロの標的ともされる訳です。

チャヤノトの春の祭典では、式典でタゴールの歌を歌っている様子が、テレビで全国に中

継ぎされていきました。その中で、爆弾テロが仕掛けられ、多くの人が命を落としたので、その事件は、大きな衝撃を与えました。

私の知り合いの大学の先生でヒンドゥー教徒の出身だった方が、この頃にお会いすると繰り返しこの話をして、「もうこの国に、自分たちは住むことはできない。この国で暮らす限り、ヒンドゥー教徒として、いつ家族がこのような事件に巻き込まれるか分からない。」と話していました。

気が付くと、その先生はインドに移住していました。マイノリティのヒンドゥー教徒が、バングラデシュからインドへと移住する傾向は昔から続いているのですが、その結果として、宗教的マイノリティの人口は長期的に減り続け、その傾向は独立以後、ずっと続いています。

さて、次の新たな段階と思われるのが、この表でいうと二〇〇五年以降の出来事です。この時に衝撃を与えたのは、二〇〇五年八月の同時多発爆弾テロです。バングラデシュは六四の県 (District) があります。この時に、事件の実行犯は、そのうちの六三の県の官庁前などで、一斉に爆弾を爆発させました。

この時の爆弾は小型のもので、被害はそんなに大きくはなかったのですが、ほぼ三〇分程度の間隔で、全国で同時に爆破させたので、これは相当しつかりした組織がないとできないことだと考えられ、テロ集団の組織力を見せつけるきっかけとなりました。

また、この時のテロ事件が起きた背景には、このひと月前の二〇〇五年七月に起きた、ロンドンでの同時多発テロ事件の影響が指摘されています。二〇〇一年にはアメリカで九・一一の同時多発テロ事件があり、二〇〇三年にはイラク戦争が始まるので、グローバルなイスラームとテロをめぐる世界の動きが、バングラデシュ社会にもさまざまな形で影響を及ぼしていることが指摘されるようになりました。

<2005年以降の国際的なテロ事件の影響>

2005年8月の同時爆弾テロ事件は、バングラデシュの63県の459か所で、時限爆弾を作動させる。テロ集団の組織力を見せつけ、大きな衝撃を与える。

ひと月前には、ロンドンの同時多発テロ。2001年の9.11やその後のイラク戦争などを背景に、国際的なテロの動きの影響を受けて、そのレベルを上げてゆくと考えられる。

2008年には、ダッカ大学のSayed Golam Maulaの逮捕、2010年にはProf. Mohiuddin Ahmedらの逮捕(国際的なイスラーム組織、Hizb ut Tahrirのバングラデシュの指導者)

→ この頃から、大学の内部に影響を広め、学生を組織するというパターンが見られる。今回のテロの実行犯となった私立大学生の問題に、それは結びつく。

こうして、2013年にはシャハバグ運動が起き、それに対抗する運動の中から84名のプロガー・リストが公開され、その後の殺害事件へと発展する。

8

バングラデシュでも、海外でのテロのやり方に触発され、またその手法に影響を受けることで事件が引き起こされるという形で、グローバルな段階に入ったと言えるかもしれません。

特に、二〇〇八年以降はヒズブット・タヒリル (Hizb ut Tahrir) という組織が、バングラデシュの中で活動を広げたことが知られています。特に、この時には、ダッカ大学の先生がそのシンパとして、何人も検挙されました。その後、ラジシャヒ大学などでも、この組織に関わった容疑者が摘発を受けることで、大学の関係者が検挙されました。留学や研究などで、海外とのつながりを持つ大学の研究者のネットワークを通して、バングラデシュの国内に組織的な活動が広がっていく、といった経緯が指摘されました。大学の関係者がこのような組織の影響を受けて活動をし、キャンパスで学生に影響を与えることで、活動員としてリクルートしていくという動きが、指摘されるようになりました。

今回のダッカでのテロ事件も、私立大学の名門校であるノース・サウス大学のキャンパスが、テロ組織の活動場所として利用され、学生がテロの実行犯として勧誘されたことが指摘されました。そのような傾向が、この頃から見られていたことが分かります。

以上が、今回の事件に結び付くことになる、またその背景を与えると考えられる、独立後のバングラデシュで起きた、イスラーム主義運動に関わる主な事件です。

以上、大変に駆け足ではありますが、ダッカでのテロ事件の背景として、バングラデシュの独立以来の宗教と政治をめぐるさまざまな問題を振り返ってみました。

これはまだ、一つの見方として、こういうふうに見ていくのだろうか、今思っているところなのですが、そこから現代の問題を、より掘り下げて見てゆけたらと考えています。

バングラデシュでは、急速な経済成長と若者への教育の拡大にと
もない、ダッカでは大学の建設ラッシュが続く。清潔で近代的な設備
を整え、欧米のシラバスを取り入れた英語で授業を行う私立大学が、
富裕層の子弟の受け皿として人気を集める。

テロ事件の後、富裕層の学生がテロ組織に勧誘されてしまう、大学
の教育環境が問題となる。実学が中心のカリキュラムで、ベンガル文
化が教えられていない事が批判される。教育大臣ヌルル・イスラム・
ナヒドは、「バングラデシュの教育機関では、自国の文化や遺産や
歴史が教えられるよう指導されなければならない。」と演説する。



4. ダッカの大学生をめぐる問題
Cf. 配布資料「人文学の知でテロを防ぐーバングラデシュ・ダッカの
テロ事件と大学での教育への取り組み」

2016年7月1日のテロ事件からひと月後に、ダッカの知り合いの
文化人類学者の研究室を訪れた時に聞いた話：

「バングラデシュの私立大学の多くは、文化人類学や民俗学の科
目がほとんど教えられていません。それだけでなく、母国の歴史
や文化を学ぶ人文学系の学問が、全くおざなりにされています。
そのことが、今回のテロ事件の背景にはあると、私たちは考えて
いるのです。」

ダッカのテロ事件と大学での人文学系の教育科目という、ほとん
ど関わりのないような問題が、しかし、連日、バングラデシュではメ
ディアを賑わせる話題となっていた。

それは、石山さんや南出さんの報告にもありましたが、現代のバングラデシユの若者たちが置かれている状況にも、結びつく問題であると考えています。

たとえば、この事件を受けて、バングラデシユのメディアで議論されているのは、今お話をしたようなバングラデシユの歴史、ベンガルの文化について、これまでバングラデシユの学校や大学では、ちゃんと教えてこなかったのではないか、という問題です。

ベンガルの文化や歴史についての教育がおざなりにされてきたことが、大学で若者が、過激なイスラーム組織に勧誘され、イスラームの原理主義的な思想に簡単に洗脳されてしまうひとつの理由ではないか、ということが議論されています。

今回のテロ事件を踏まえて、そのためバングラデシユの教育関係者の間では、教育大臣などの政治家を含めて、大学での教養的教育などのカリキュラムが見直されるようになっていきます。

その大学での教育の問題については、拙稿[※]にもまとめたものがあるので、お時間がある方は、見ていただければ幸いです。

これで、私の報告は、もう時間切れになると思います。

用意したレジユメのすべてをご紹介することはできませんでしたが、ご質問などがあれば、デイスカッションの部などで、また時間の許す限り、お話をさせていただければと思っています。

今回の事件を受けて、今もいろいろな問題がさまざまな形で論点として出されているので、今後とも議論を続けてゆけたらとも思っています。

本日は、そのさまざまな動向の一端を紹介するという形で、お話しさせていただきました。ありがとうございます。

※「人文学の知でテロを防ぐーバングラデシユ・ダッカのテロ事件と大学での教育への取り組み」『フィールドプラスー世界を感応する雑誌』17号、東京外大A A 研編、二〇一七年一月、pp. 22-23.

表—1 Bloggers and Minorities Killing since 2013

2013	Jan	Asif Mohiuddin	Blogger, Atheist	ABT	
	Feb	Ahmed Rajib Haider	Blogger, Atheist	JMB	
	March	Sunnyur Rahaman	Blogger, Atheist		
2014	Nov	Shafiul Islam	Teacher of RU, Secular	ABT	
2015	Feb	Avijit Roy	Blogger, Atheist, US citizen	ABT	
	March	Oyasiqur Rhman	Blogger, Secularist	ABT	
	May	Ananta Bijoy Das	Blogger, Atheist,		
	Aug	Niloy Chatterjee	Blogger, Secularist	ABT	
	Sept	Cesare Tavella	Italian		
	Oct	Faisal Arfin Dipan	Publisher		
		Ahmedur Rashid Tutul	Publisher		
		Ranadeep Basu	Publisher		
		HOSHI, Kunio	NGO, Japanese	ISIL	
		Sazzad Hossain	Shia		
Sanju		Shia	ISIL		
Rev. Luke Sarker		Christian			
Nov		Moazzem Hossain	Shia Muezzin	ISIL	
2016		Feb	Jogeshwar Roy, 2 others	Hindu priest	ISIL
		April	Nazimuddin Samad	Blogger	
	Rezaul Karim Siddique		Prof. of RU	ISIL	
	Xulha Mannan		LGBT		
	Tanay Majumdar		LGBT	ISIL	
	Nikhil Joarder		Hindu	ISIL	
	May	Mohammad Shahidullah	Sufi	ISIL	
		Maung Shu U Chak	Buddhist Monk		
		Mir Sanaur Rahman	Homeopathy		
		Saifuzzaman	Homeopathy	JMB	
Debesh Chandra Pramanik		Hindu	ISIL		
June	Ananda Gopal Ganguly	Hindu priest			
	Nityaranjan Pande	Hindu servant			
	Ripon Chakraborty	Hindu college teacher			
July	Shyamananda Das	Hindu servant			
	Mong Shwe Lung Marma	Buddhist			
	Holey Artisan Bakery		ISIL		

注) 2013年2月から2016年7月の三年半で殺害された犠牲者は49名とも言われる

表一2 Development of Islamist Militants in Bangladesh

第一
部

- 1979-1992 Afghan war, 3,000 volunteers joined from Bangladesh
- 1987-89 Ekattorer Ghatak o Dalalra Ke Khotae (『独立戦争に敵対しパキスタン軍の手先となった者は今どこへ』) の編集・出版
- 1990- Murtad Talika Ghoshona (「背教者・反イスラーム主義者のリストの公開」、Ahmad Shalif, Shamsul Rahman, Taslima Nasreen, Humayun Azad, etc.)
- 1991 JI 党 20 議席確保、BNP に閣外協力、Golam Azam の JI 党総裁就任(12 月)
- 1992 71Ghatak 撲滅委員会の市民法廷で死刑判決、15 万人の傍聴、Azam の逮捕
Harkat-ul-Jihad-al-Islami (HUJI) founded by Shafiqur Rahman
- 1993 Golam Azam の市民権の認定 (1978 年にパキスタン旅券で帰国後)、釈放
Taslima Nasreen の Lajja や発言を非難し、政府に逮捕要求、脅迫、死刑宣告
- 1994 Taslima Nasreen に逮捕状、西欧に出国
- 1998 Jaamatul Mujaheddin Bangladesh (JMB) founded
NGO 団体プロシッカへの襲撃事件 (ブラフマンバリヤ事件)
- 1999 Shamshul Rahman への襲撃 HUJI-B
文化団体ウディチへの爆弾テロ(死亡 17) HUJI-B
- 2001 Hizb-ut-Tahrir Bangladesh (HBTB) founded
ロムナ公園の新年祭(Baishakhi Mela)への爆弾テロ、(死亡 10) HUJI
- 2002 Bangladesh: Cocoon of Terror が *Far Eastern Economic Review* に掲載
映画館への連続爆弾テロ(サトキラ 3 名、モイモンシン 21 名死亡)、反西洋文化
- 2004 Sheikh Hasina への爆弾テロ (8/21, 死亡 20)
Humayun Azad への襲撃 JMB
- 2005 63 県の 459 か所の時限装置による同時爆弾テロ (8/17, 死亡 2) JMB
政府、JMB の活動禁止、JMB の自爆テロの増加、11/14、11/29、12/1、12/8
- 2006 JMB の指導者 Abdul Rahman 他 7 人の逮捕、含 Bangla Bhai
- 2006-7 Ansarullah Bangla Team (ABT) affiliated with Al Qaeda on the website.
- 2008 Sayed Golam Maula (Dhaka Univ. Prof., Hizb ut Tahrir 指導者 leader) 逮捕
- 2009 ボラ島の JMB 拠点を摘発、Leaders of Lashkar-e Taiba 逮捕
HBTB (Hizb ut Tahrir) banned
- 2010 Mohiuddin Ahmed (Teacher, Dhaka Univ., HBTB) and Maula arrested
- 2013 Hefazat Islam が 84 名の「無神論者ブロガーのリストの公開」
Ansarulla Bangla Team が SMS で脅迫メールを送り、殺害を繰り返す
Rajib Haider の事件では、ABT に属する NSU の大学生が逮捕
- 2015 Feb. Zawahiri of Al-Qaeda called Bangladesh people ‘against the enemies of Islam’
Nov. *Dabiq* of ISIL: ‘a new light of hope was born amidst the Muslims of Bengal’

第二部

「コメントとその後の展開」

日下部 尚徳（東京外国語大学）

（目下部）（石山さんの）「NGOが考える安全対策」というスライドの中で、「NGOは現実社会からの『受容』による安全対策を重視。中立性・公正性を示し、活動を通じて信頼関係を築くことで活動」すると指摘されています。ここでいう中立性・公正性が現場できちんと保たれているのかということが非常に難しい問題となります。バングラデシュの例で言えば、クリスチャン・ビレッジにだけキリスト教系のNGOが多く入っており、他の多くのムスリム・ビレッジに比べて災害後の復興が進んでいるといったケースが、少なからず見られます。こういった、分かりやすい不公平が積もり積もって、NGOやそこで働く人びとが社会から受容されにくくなってしまっているのだと思います。

二〇一五年に、星邦男さんが殺害される事件が発生しました。星さんはバングラデシュ北部のランプルで、ベンガル語をしゃべり、農業指導で現地の人と信頼関係を築き、モスクでベンガル人と一緒にお祈りもするという、まさに現地に溶け込んだ生活を送っていました。つまり受容の程度で言えば最も高く、狙われるリスクとしては最も低いはずの人が、二〇一五年に殺害されたということになります。

このことは、青年海外協力隊やNGOなど、農村で現地に溶け込む生活を送っている人であつても、テロのリスクは避けられないことを示しています。

NGOが考える安全対策

国際協力事業安全対策会議（9/30）に先駆けてバングラデシュで活動するNGOとして方針を整理

- 政府や企業が考える安全対策「防御」中心
- NGOは現地社会からの「受容」による安全対策を重視。中立性・公正性を示し、活動を通じて信頼関係を築くことで活動。服装や使用言語により溶け込む努力。
- 但し「防御」もしている。日本人派遣も必要最低限に。車移動、仕事場や滞在先の安全強化、不要不急の外出は控えるなど。

日本のNGOが関わることで下げたはずの貧困・格差を将来に残すことがないよう、安全対策を強化しながら、現場にできるだけ近いところで活動を継続する方針



しかし、だからといって活動を停止するわけにはいきません。止めてしまえばテロリストの思うつぼになってしまいます。このような背景のもと、現実問題としてNGOがどのようにしてスタッフの安全を担保していくのかという点に関して、石山さんにご意見いただけたらと思っております。

外川先生のご発表に関しては二点質問がございます。一つは、独立時期からの問題を総括する、決着をつけるという表現ありましたが、具体的にはどのような形があり得るのか、ご教示いただけたらと思います。

もう一つは、大学で民族教育のようなものをきちんとやっていくことの重要性は、さまざまな社会の分断、例えば宗教での分断、所得での分断、学歴での分断といったものを縫い合わせるという意味があると思うのですが、民族教育の強化により、逆にバンングラデシユ人アイデンティティに過度な重点が置かれるといった危険性はないでしょうか。

先生方への質問は、僭越（せんえつ）ながら以上になります。

私の方は、その後の展開をご説明していきたいと思えます。

テロの二週間後に、ハシナ首相が「テロリストが更なる攻撃を計画しているとのインテリジェンス報告を得ている」と発言し、引き続きテロへの警戒を呼びかけました。実際にヒンドゥー教徒を狙うようなケースが発生しています。

また、七月二六日には、カルヤンプル（コッランプール）でテロリストの潜伏先に対する掃討作戦で、容疑者九名が死亡、一名が逮捕されました。このときにISの旗をバックに載せた写真が新聞にのり、「これでもう大丈夫だ」という終結宣言のような雰囲気となりましたが、その後も武装勢力に対する掃討作戦は続いていくこととなります。



時系列的にいきますと、テロから一カ月後の八月の段階で、日本の外務省の海外安全情報でバングラデシュ全土がレベル二に上がります。それまではチッタゴン丘陵など一部の地域だけがレベル二でしたが、ダッカを含む全土がレベル二になりました。

八月九日から一日にかけて、多数の容疑者がダッカ市内で治安当局に逮捕されます。その中の一部が自爆攻撃を計画していたり、爆発物が押収されたりと、危機がまださつていないことが明らかになります。

八月二四日、IS系の通信社であるアマーク通信が、ノルシンデイにおいてヒンドゥー教聖職者を刃物で襲撃したという事件に関して、犯行声明を出します。また、アマーク通信の同じ号で、ISはこれまで二六回の攻撃で七人のヒンドゥー教徒を含む四六人を殺害したとも指摘しています。

さらに八月二七日はナラヤンゴンジで掃討作戦が行われ、テロ事件の首謀者とされるバングラデシュ生まれのカナダ人、チョウドリー容疑者を含む三人の容疑者が治安部隊によって殺害されます。警察は容疑者の情報に対して二〇〇万タカの懸賞金を懸けて情報を集めていました。

与党のアワミ連盟は、掃討作戦と同時平行で、政治的に野党を追い詰める政策を取っていきます。バングラデシュ独立の際にパキスタンの側について、虐殺行為をはたらいた者を裁く戦犯裁判で、イスラーム主義政党であるジャマアテ・イスラーミーの幹部に対して八月三〇日に死刑判決が出され、九月三日に死刑が執行されました。これで、戦犯裁判によりJ I 幹部六人とBNP 幹部一人に死刑が執行されたことになります。

グルシャン・アタックその後

- 8月5日
- 全土(首都ダッカを含む)に海外安全情報(危険情報)「レベル2: 不要不急の渡航は止めてください。」が発出。
- 8月9日-11日
- 9日から11日にかけて、多数の容疑者が当局によりダッカ市内で逮捕。警察が報道関係者に述べたところによると、これらの容疑者は自殺攻撃を計画。爆発物等が押収された。

グルシャン・アタックその後

- 7月13日
- ハシナ首相が「テロリストが更なる攻撃を計画しているとのインテリジェンス報告を得ている」と発言。引き続きテロへの警戒が必要であることを述べる。
- 7月26日
- 早朝、ダッカ市内カルヤンプル地区において、治安当局がテロリストの潜伏先に対する特別作戦を実施。銃撃戦により容疑者9名が死亡、1名を逮捕。

九月一〇日には、ダッカ市内アジンプール付近にて治安部隊と武装主義勢力との間で銃撃戦が発生し、容疑者三名（うち、一人は女性）が逮捕されました。

九月二三日には、ISが、ベンガル（地域）にいる不信心者、多神教信者、無神論者に対して、殺害の脅迫を行う内容の動画を公開しました。ダッカ襲撃テロ事件の実行犯たちが映像に出てきて、ベンガルのムスリムに対して、不信心者の殺害を促す場面も含んでいた内容でした。この動画をWEB上で探したのですが、削除されており見られませんでした。一部はベンガル語で放送されていたと聞いています。

一〇月一日には、BNPタレク・ラフマン副総裁に対して逮捕令状が発出され、翌二日にダッカ市内においてBNPが抗議デモを実施しました。タレク副総裁はカレダ・ジアBNP総裁の息子で、現在イギリスにいます。カレダ・ジア総裁自身も二〇一六年初頭に逮捕令状が出されています。アワミ連盟のBNPとジャマーアテ・イスラーミーを徹底的に追いやるうという政治姿勢が見受けられます。

一〇月三日には、ISが、まだ第二号が出たばかりの新しい非アラビア語宣伝誌「ルーミーヤ」で、「グルシヤン攻撃の殉教者」という記事を掲載しました。その中で初めて「日本」という単語が使われます。実はこれまでISの声明文には日本という単語は使われていませんでした。今回のテロ事件に関しても「十字軍のメンバーを狙った」という言い方をしており、日本を狙ったという言い方はしていません。ルーミーヤでは、「日本人、イタリヤ人、アメリカ人などをグルシヤン・アタックで殺害した」という言い方になっています。どちらにしても、初めてイスラーム武装勢力系の通信社の雑誌の中で、「日本」という言葉が使われており、ここでもテロ事件の実行犯五人を、殉教者として紹介しています。

グルシヤン・アタックその後

- ・8月27日
- ・ナラヤンゴンジにおいて、警察の治安部隊による武装主義組織の潜伏先に対する急襲作戦が実施。グルシヤン・アタックの首謀者とされるタミム・チョウドリー容疑者（バングラデシュ生まれのカナダ人）を含む、3名の容疑者を殺害。
- ・警察は、タミムの情報に200万タカの懸賞金をかけていた。

グルシヤン・アタックその後

- ・8月24日
- ・IS系通信社アマーク通信は、ISが23日に、ノルシンディにおいてヒンドゥー教聖職者を刃物で襲撃したと報道。
- ・これはISのバングラデシュにおけるサポーターによる26回目の攻撃で、2015年9月28日から、7人のヒンドゥーを含む46人を殺害したとも指摘。

次の一文は、ルーミーヤに掲載されたものを在バン格拉デシユ日本大使館が日本語訳したもので、そのまま掲載させていただきました。これを少し読ませていただきます。

「イスラーム国と戦い続ける限り、十字軍の市民はベンガルのどこであっても平和と安全を享受できないことを、十字軍諸国に知らしめよ。ジハード戦士は『安全性の欠陥と抜け穴』を発見し続け、十字軍がいる場所であればどこでも彼らを待ち伏せする。ジハード戦士は、ベンガルが十字軍や他の全ての非ムスリムから清められ、アッラーの律法が同地に確立されるまで、十字軍出身の市民でベンガルにいる全ての外国人、旅行者、外交官、衣服のバイヤー、宣教師、スポーツチーム、その他誰でも標的とするだろう。そして、無力な背教者であるベンガルの法執行機関が与える、安全性に関するその約束にだまされて安全だと誤解している連中は、じきに重い代償を払うだろう。チェザレ・タヴェラは警告で、ダッカ襲撃テロ事件は片鱗にすぎない。」チェザレ・タヴェラさんはイタリア人で、オランダのNGOで働いていました。二〇一五年九月にダッカで何者かに銃で撃たれ死亡しました。

また、今回のテロ事件はまだ片りんにすぎないと脅迫した上で、「外国人、旅行者、外交官、衣服のバイヤー、宣教師、スポーツチーム」など、かなり具体的にバン格拉デシユにいる可能性が高い外国人を名指ししています。これらのことから、今後バン格拉デシユでの活動はかなり厳しくなると予想されます。どんな対策をとったとしても、リスクをゼロにすることはできず、今回のようなテロ事件が起きない根拠付けにはなりません。今後バン格拉デシユと日本がどのような関係をつくっていくべきなのか、真剣に考えていく必要があると思います。

事件を受けて外務省は、国際協力事業安全対策会議を設置して安全対策を取りまとめ、緊急連絡網の作成や訓練の実施、防弾車などの安全機材の強化を進めました。その上で、

グルシャン・アタックその後

- ・9月10日
- ・午後8時頃、ダッカ市内アジンプル付近にて治安部隊と武装主義勢力との間で銃撃戦が発生。容疑者3名(うち、1人は女性)が逮捕。
- ・9月23日
- ・ベンガルにいる不信心者、多神教信者、無神論者に対し、殺害の脅迫を行う内容の動画を公開。
- ・ダッカ・アタックの実行犯達が、ベンガルのムスリムに対し、不信心者の殺害を促す場面を含む。

グルシャン・アタックその後

- ・8月30日
- ・イスラム協会(II)は、ミル・カシム・アリ同党中央執行委員会メンバーに対する戦犯裁判の再審請求が最高裁によって棄却され、死刑が確定したことに対して抗議するために、31日午前6時から日暮れまで全国規模の平和的ハルタルを実施する旨を発表。
- ・9月3日
- ・午後10時35分、ミル・カシム・アリ同党中央執行委員会メンバーに対する死刑が執行。
- ・(国際戦犯裁判による死刑執行は8人目)

二〇一七年六月には、火力発電所建設や国際空港拡張工事などを含む、総額一八〇〇億円におよぶ貸付契約が締結されました。これにより、二〇一四年に日本政府が表明した六〇〇〇億円の支援が、四年間で達成される見込みとなりました。現地渡航が制限される中、例年通りのスケジュールで支援を継続できたことは、テロに屈しない、強固な二国間関係をアピールする上で、極めて重要な意味があったといえます。

JICAは、治安の悪化しているイラクやアフガニスタンといった地域では、嚴重な安全対策のもとで活動をおこなってきました。しかし、バングラデシュのように、治安面での大きな不安がなく、それ故に大規模かつ全国的に支援を実施している国で、援助関係者がテロに巻き込まれるという事態は想定しておらず、事件以降、家族を帰国させたり、夜間外出やレストランでの食事、車以外での移動を原則禁止したりするなどの対策を徹底しました。今後の日本の国際協力においては、宗教的に中立で、しかも相手国のためによりよいことをしているのだから、テロの標的になることはないという、これまでの定説が通用しないという前提に立って、安全確保を最優先にした実施体制が求められているといえます。

また、進出している二五〇社の日系企業も、警備員の増強や避難路の確保、防犯カメラの設置など、援助関係者同様に安全対策を徹底し、企業活動を継続しています。テロ以降も進出企業は増加しており、バングラデシュ経済に対する期待の高さがうかがえる一方で、テロの脅威にどう対処していくのか、官・民一体となった模索が続いています。このように、今回のテロ事件は、穏健なイスラム国家とみられていたバングラデシュのイメージを一八〇度変えたという意味で、そのインパクトはきわめて大きかったといえます。

さらに、バングラデシュの不安定化は、周辺国にも影響を及ぼす可能性があります。バングラデシュは、インドとミャンマーに国境を接しています。インドには、一億八〇〇〇万人ものムスリムがいますが、人口の八割をヒンドゥー教徒が占めることから、ムスリムは圧倒

- ・イスラム国と戦い続ける限り、十字軍の市民はベンガルのどこであっても平和と安全を享受できないことを、十字軍諸国に知らしめよ。(中略)
- ・ジハード戦士は「安全性の欠陥と抜け穴」を発見し続け、十字軍がいる場所であればどこでも彼らを待ち伏せする。
- ・ジハード戦士は、ベンガルが十字軍や他の全ての非ムスリムから清められ、アッラーの律法が同地に確立されるまで、十字軍出身の市民でベンガルにいる全ての外国人、旅行者、外交官、衣服のバイヤー、宣教団、スポーツチーム、その他誰でも標的とするだろう。そして無力な背教者であるベンガルの法執行機関が与える、安全性に関する嘘の約束に騙されて安全だと誤解している連中は、じきに重い代償を払うだろう。チェザレ・タヴェラは警告で、ダッカ襲撃テロ事件は片鱗にすぎない。これから起きることは、より酷くはるかに悲惨であろう。

・(訳: 在バングラデシュ日本大使館)

ダッカ・アタックその後

- ・10月1日
- ・BNPタレク・ラフマン副総裁に対して逮捕令状が发出される。翌2日、ダッカ市内においてBNPが抗議デモを実施。
- ・10月3日
- ・ISの新しい非アラビア語宣伝雑誌「ルーミーヤ」英語版第2号で「グルシヤン攻撃の殉教者」を掲載。その中で、日本という単語が今回のテロに関する声明の中で初めて使われる。また、ダッカ襲撃テロ事件の実行犯5名を殉教者として紹介。

的な少数派になります。ヒンドゥー至上主義的な言動で知られるモディ首相が政権の座について、ムスリムが社会的な疎外や政治的な差別を感じる場面が増えたともいわれています。また、東側を接するミャンマーは、イスラーム教の少数民族ロヒンギャと政府の間で紛争の火種を抱えており、二〇一七年一月の段階で七万人近いロヒンギャ難民が、バングラデシュに避難する事態となっています。さらに、世界第二位のムスリム人口を抱えるパキスタンは、アメリカとともにテロとの戦いの最前線にありますが、親米的な政策に対する国内からの批判は後を絶ちません。

このように、バングラデシュの周辺地域に暮らすムスリムの中には、国際社会やそれぞれの国の政府に対する不満を抱える人が少なからず存在します。そんな中であつて、一億四〇〇〇万人のムスリムが暮らすバングラデシュの宗教と政治の関係が安定していることは、地域の安定にとつて、大変意味のあることでした。もしバングラデシュがテロの温床になるようなことがあれば、武装勢力のネットワークを通じて武器や資金の流れが活発化し、テロの連鎖が南アジア全体に飛び火しかねません。

シリアやイラクのISの勢力が弱まる中、戦闘員がそれぞれの国に帰国しているともいわれ、国際的な過激思想に共鳴した国内出身者による、いわゆる「ホームグロウン」型のテロや、単独犯による「ローンウルフ」型のテロが、五億人ともいわれる世界最大のイスラーム人口を抱える南アジアで活性化する可能性は否定できません。今回の事件を機に、バングラデシュが南アジアの安定にとつていかに重要であるのか、国際社会は気づかされることになりました。

バングラデシュは昨年、GDP成長率が過去最高の七%台を記録し、今年もひきつづき順調な経済成長を続けています。急速な経済成長は既存の社会の価値観や社会のヒエラルキーにも大きな変化を生じさせます。これまでの社会ではあり得ないような立身出世を成し遂げ

外務省の対応

- ・外務省では国際協力事業関係者の安全対策を再検証し新たな対策を策定するため外務大臣の下に「国際協力事業安全対策会議」を設置。
- ・7月12日から8月30日まで計5回の会合を開催し、報告書を作成。
- ・(1)脅威情報の収集・分析・共有の強化
- ・(2)事業関係者及びNGOの行動規範
- ・(3)ハード・ソフト両面の防護措置、研修・訓練の強化
- ・(4)危機発生後の対応
- ・(5)外務省・JICAの危機管理意識の向上・態勢の在り方について

るものや、宗教的な価値観よりも経済的な価値観を全面に押し出す人も現れます。現実広がる貧富の格差や、伝統的価値観の崩壊などに接して、人びとが懐古主義的なイスラーム教の言説になびくこともあるかもしれません。このような社会変化の渦中におきた今回のテロ事件は、実行犯全員が射殺されたことにより、一人一人がISの理念に共鳴するにいたった経緯は不明のままですが、今後バングラデシュにおける宗教と社会の関係がどのように変化していくのか、動向を注視する必要があります。

日本の国際協力に関していえば、日本人の命を危険にさらしてまで、なぜ支援を継続するのかという批判もありますが、テロが原因で援助が途絶えてしまつては、それこそテロリストの思うつぼです。平和を望む多くのムスリムを支援しているという姿勢を明確にすることで、イスラーム社会と良好な関係を築くことが、結果としてテロの脅威の軽減につながると考えられます。

リプライ

高田 峰夫 (広島修道大学)

南出 和余 (桃山学院大学)

石山 民子 (アジア砒素ネットワーク)

外川 昌彦 (東京外国語大学)

(司会) ありがとうございます。今、日下部さんから幾つか問題提起というか質問が投げ掛けられましたので、まずそちらの方をお一人ずつ答えていただいてから、フロアの皆さんからの質問を受けたいと思っています。

最初に高田さんをお願いしたいのですが、なぜラマダンをあえて狙ったのかということですね。それから、武装組織の中での世代間の違いなどがあるのでしようかというご質問だったと思います。

(高田) 最初の質問ですが、冒瀆したかったのか、やりやすかったからその日だったのかという質問は、恐らく単純にやりやすかったからではなく、やはり意図的に冒瀆したのだと思います。なぜかという、単純にやりやすいというのであれば、その一日前、二日前でも構わなかったはずですよ。ほとんど状況は変わりませんから。でも、あえてあの日に狙ったというのは、それはやはり意図的に冒瀆したとしか解釈できません。

問題は二番目の質問に関わるのですが、意図的にそういうことをやると現地の人々の支持を得られなくなるのではないかと。それなのになぜかというのは、はつきり言って恐らく、支持を考えていないと私は思っています。とにかく「大きなことを起こせばいい」というのが基本的なスタンスで、実際問題としてバンングラデシュにカリフ制を敷くとか口では言っているけれども、実際にそれを起こせるとは思っていないし、起こそうとも思っていないのだろう

と。だから全体の支持は必要ないわけです。それがあってはならないか。

もう一つは、実行した人たちの理解なのですが、そもそも彼らは地元の人イスラームのことを、一部の人、特にマドラサの学生などは分かっているでしょうけれども、多くの人、特に高等教育を受けた人たちは分かっています。ませんでした。

例えばグルシヤンの事件の事実上の現場リーダーをやっていたニブラスという容疑者や、もう一人、マレーシアのモナシユ大学に行っていた。その二人は、実はマレーシアに行つてしばらくの間は、パーティーで酒を飲んで、女の子たちと一緒にどんちゃん騒ぎをしようちゅうやっていました。それ以前は、そもそもイスラームのことはあまり考えもしないし、実践もしない。そういうことを平気でやっていました。それがいつごろからか急に変わり出したのは、恐らくリクルーターと会つてしまつて、そのリクルーターが言ったことになまく乗せられてしまつたのでしょう。それで急激に変わり始めます。

そのリクルーターが吹き込む形の「イスラーム」というものに、ある意味乗せられてしまつて、バンングラデシユの普通の人たちが実践しているものは「もうずれている」と、勝手にその視点から見ると、決め付けてしまふ。だから、むしろ冒瀆するというか、そういうずれているものは潰した方がいいという感覚になつてしまふのではないかなど。恐らく、そういう文脈で理解しないと、分からないのではないかと思います。

それから、三点目の国内と国外の違いに関しては、これは国外といつても一つは中東のISなどのことを考えなければいけないし、もう一つはさっき言ったマレーシアやカナダのことを考えなければいけない。実はここで忘れられているのは、すぐ隣がインド側なのです。インド側のことを多くの方は忘れていきます。先ほどの外務省の文書の終わりに訳された中でも、「ベンガル」ということをわざわざ言っています。これはウエストベンガルも含んでいるのです。現実に、実はNew JMBと言われる人たちはインド側に行つて、爆弾事件を起こ



そうとして、その前に失敗して、一昨年ですか、自分たちが爆発で一人吹き飛んでいます。それがインド側でもすぐ問題になって追及されていて、ちょうど今月に入ってから先月の末か、ほぼ同時にインド側で五人、違う場所で逮捕されています。

ですから、国外といつても、むしろバングラデシュとその周辺地域を意図的にJMBは活動地域に狙っていて、実際、今回の事件の関係者の何人かは、ほぼ間違いなくインド側に逃げてしていると推定されています。ですから、中東の問題を考えるよりは、むしろ周辺との問題を考えるべきではないかと私は思います。

それから、H U J I (Harkat-ul-Jihad-al-Islam) みたいなのとNeo JMBみたいなものの、世代間の断絶、または関係はどうかということ、恐らく断絶はある程度はあるでしょう。当然、H U J Iは、かなりたたかれましたし、元のJMBのトップ、それからセカンドの人も殺されてしまいました。

ただ、重要なのは、先ほど外川さんの報告のレジユメの方にありまして、省かれましたが、H U J Iの時期、またはそのもう少し前に、アフガンやチェチェンに行った人たちがいます。いろいろな説があるのですが、バングラデシュから三〇〇〇〜四〇〇〇人、それ以上の人が志願兵で行ったといわれています。その一部は残っていますが、実は多くはバングラデシュにもう帰ってきていて、有名になっっている人が何人もいます。

彼らは実際に武装闘争ではなく、戦争をやったことがあるわけで、武器の取り扱い、弾薬の取り扱いにも慣れています。ですから、その一部の人たちが、バングラデシュの国内で、こういう武装闘争を起こしている人たちの背後で、一種のトレーナーとして関わっている可能性は十分にあると思います。そういうつながりはあるのだろうけれども、ただ世代間としては、やはりある程度、断絶があるのが間違いないかもしれません。そのぐらいですかね。

(司会) はい。ありがとうございました。

次は南出さんの方で、特にマドラサの実際についてという問い掛けだったと思いますが。

(南出) ありがとうございます。貧しさ故のテロのような、そういう語りがあるのではないかとこのところ、マドラサの増加ということでした。マドラサが増えているというのは発表の中でも申し上げましたが、学校が増えていることと比例しているのだと私は思います。マドラサだけが増えていると捉えている研究者もいらつしゃるかもしれませんが、私はマドラサだけが aumentando ではなく、マドラサ「も」増えているということだと見ています。マドラサと世俗的な学校のダブルスクールをしている子どもたちもたくさんいる中で、いわゆる学校ブームのようなことが言えるのではないかと思います。

なぜマドラサに行くのかという動機においても、発表の中で言いましたように、日常の実践での宗教が基本的にはあって、その中の学校教育の浸透という文脈で、マドラサもあるのではないかと思います。その中で、マドラサでイデオロギー的な教育を受けて、ある種の過激な思想になっていく人もいるのではないかとすることは、確かにあり得ると思います。一つにはグローバル化の影響はマドラサにももちろんあります。マドラサは中東からの支援をたくさん受けていますし、イデオロギー的にもつながりがあります。その意味ではマドラサの中の多様性も広がっていると考えるのではないかと思います。

若者の分断というのは確かにそうなのですが、その中で過激な方向に行く若者たちと、そうではない若者たちを分けられるわけでは決まらないと思います。ただ、既に現地の関心としては、イスラームだからというより、特にあの事件以降、小学校のレベルからも学校で危惧されているのは、いかにマインドコントロールされないか、情報処理あるいは外からのイデオロギー的な影響を受けないかということであって、イスラームを問い直すということではないのではないかと思います。

私はあえて連続性を考えるならば、それはイスラームというより、都市化の問題があるの



ではないかと思えます。イデオロギー的なものをどのように受け止めるかにおいて、農村の若者たちにとっても都市化というのは、教育だけではなく影響を及ぼす兆候だと思えます。そういう面からは連続性というのも検討できるのかと思えます。

マドラサの増加をどう捉えるかについても私は疑問ですし、そこでイデオロギー的に教育を受けたものが貧しさ故にといった主張から過激な行動を取ったというよりは、外からのグローバルな文脈の中での影響があつたのではないかと思えます。そういう意味では、外川先生の発表にあつた国内的な政治の文脈と今回の七・一の事件を果たして連続的な文脈において捉えてよいのかというのは疑問です。

(司会) ありがとうございます。

では石山さんですが、特に星さんの事件と他との関わりと、安全対策に関してですが。

(石山) ありがとうございます。二〇一五年一〇月にランブルの農村で、リキシヤに乗っていた日本人の星さんが、バイクに乗った三人組に撃たれて亡くなった事件がありました。そういうことから考えると、ただ現地に溶け込んでいれば安全とは言えないのではないかと、うご指摘だつたと思えます。

まず、二〇一五年一〇月の事件を予測できた人は、あまりいなかったのではないかと思えます。ただ、二〇一五年一〇月から二〇一六年七月というのは、私たちにとつても非常に重要な時間で、この間に何をしてきたのかというのは、振り返るべきところではないかと思えます。

その場所は安全かどうかという判断は、やはり自分でしなければいけないし、他の人が行っているから安全と信じ込んでしまう部分があつてはいけないと思えます。現地のいろいろな方と付き合う中で、情報を自分たちで集め、その情報を読み込む力も非常に大事だと思えます。実際、大使館からの情報でも、「外国人の集まる所には行かない」という連絡はずつ

と来ていました。そういった安全管理を、自分たちできちんとしていく能力や意識は、常に高めておくことがまず必要だと思いますが、それでもやはり絶対に安全ということはないと思います。

私は自分の団体で、スタッフでもあり理事もしているのですが、理事会の中でも慎重意見は非常に強くありました。私も、団体全体に責任を取る立場にある理事として、現場に近いところで考えたい一人のスタッフとしてとても悩みました。派遣を再開するにあたっては、まずは派遣される人が、今までの課題解決に貢献していきたい、使命を果たしていきたいという強い意思があり、また現地のさまざまな状況を読み取る力があるかどうかを重視しました。やはり、今の段階で新人を送るのは非常にリスクがあると思います。それでも現地に行ってもらっても、以前のようにリキシャに乗れるわけでもないし、村の中で一人ふらふらと歩くのは、私たちの仕事にとっては重要な時間ですが、それでもできなくなっています。

私たちは今、生活習慣病対策や思春期の栄養に焦点をあてた活動をしています。比較的新しい分野なので、モニタリングやスーパービジョンなどをしていかないと、対象者の人たちの命に関わることもあります。逆に間違った情報が伝達されて、健康リスクを高めてしまうこともありますので、ぜひとも現場に入りたいという意識は持っています。

それが限定的にしかできなくなるので、今まで一緒に働いてきたスタッフや政府の人にその機能を担ってもらうことを考えています。ただ、やはり日本人が入って状況を見ることも今の段階では必要なので、ジレンマを抱えています。補完的に、例えば第三国で会議をするとか、離れた場所で十分な話し合いの時間を持つことなども検討はしています。

私たちは今まで、十分にいろいろな経験をさせてきてもらっているのですが、何年か現場から少し離れた立場にあることになったとしても、話を聞くと「ああ、こういうことを言っているのかな」と、ある程度分かるのはありがたいところですが、やはり後輩をどうやって育成



していくのかという部分は難しいところです。現場に入っているいろいろなことを経験してこないで、感覚がつかめないとあると思うので、その部分を今後、どのようにして培っていくのか、考えなければいけないと思います。リスクを覚悟で短期的に入ってもらうこともあるかもしれませんが、あるいは離れた場所でも若い人が現場について学べる方法などを、バングラデシュに限らず、他の国や、日本国内でもそういった機会をつくっていくことはできるのかなど。そういう意味で考えると、今日のような機会は非常に重要かと思えます。

(司会) ありがとうございます。最後に外川さんですが、まず独立戦争を総括するというのは、具体的にはどのようにできるか。あとは、大学で民族教育をしていくときに、過度なナショナリズム、バングラデシュ・アイデンティティに偏らないかというご質問だと思います。

(外川) ありがとうございます。最初に、日下部先生には非常に詳細で的確なコメントをいただき、ありがとうございます。

一つ目の問題は、歴史問題にどのように決着をつけるのか。そもそも、決着がつけられるような問題なのか、という指摘でした。

これに関連して、戦争犯罪者の問題が起きたときに、特に海外のメディアは、「大変な時代錯誤だ。そんな昔の出来事を、今さら蒸し返して、どうして政治問題になるのか」といった形で、批判的な報道が多くなされました。

ただ、こうして、その歴史的な背景を見てゆくと、高田さんが指摘をされたように、バングラデシュの国内で起きていることと、このように海外で取り上げられていることにはさまざまなずれがあり、まずはこういった問題を、その起源にさかのぼって、ひも解いて見てゆく必要があるのではと思っています。

ご指摘のように、確かに、このような歴史問題に決着をつけるのは、容易なことではない

と思います。

ただ、これまでの国会選挙の中で、同じ政権が二期続くのというのは初めてのことであり、ハシナ政権は、かなり無理をしながらも、この問題に突き進んでいるようにも見えます。ハシナ政権では、イスラーム主義勢力を徹底的に弾圧し、部分的にしろ、憲法を修正して、セキュラリズムの原則を取り戻そうとするなど、それは、バングラデシュの独立時の当初の状況に、揺り戻しを掛けているようにも見えます。

しかし、そのためには、非常に大きな犠牲を払う必要がある。ある意味では、今回の事件も、その犠牲のひとつと言えるのかもしれませんが。強権的な体制を強めて、イスラーム政党をおいつめてゆく。そこまで犠牲を払ってでもやろうとするのかという問題として、これは問われているのではないかとも思っています。

二つ目の問題は、民族教育を進めることは、アイデンティティの分断をさらに進めることになるのでは、という指摘です。

これも、なかなか悩ましい問題であると思います。やはり、そこまで徹底して行うべき事なのか、という問題として問われるテーマかもしれません。ただ、私としては、このアイデンティティの問題は、さまざまな事例を通して、より広い問題との関連を通して、見てゆけたらと考えています。

シャハバク運動でもそうでしたが、一九九〇年代以降の戦争犯罪者の問題、ゴラム・アジヨムの帰還問題、さらに今日はお話しできませんでしたが、パキスタン時代の、バングラデシュの建国に至る言語運動などに、それは広く結びつく問題と考えるからです。

自分たちの自国の言葉であるベンガル語を守るために人々が立ち上がり、それが戦争をも引き起こしたという事は、バングラデシュでは国の成り立ちにベンガル文化が深く関わる問題として、よく議論されます。母語であるベンガル語が独立のきっかけになったという事



で、国連が国際母語デーを創設したのも、このバングラデシュの言語運動にちなんだものでした。

今日はお話しできませんでしたが、レジュメの後半では、そういった問題について、さまざまな事例の紹介ができればと思っていました。

一つだけ触れさせていただきます。最後の方のページになりますが、私のレジュメのスライド二五です。南アジアで「ジャットラ」と呼ばれる大衆演劇は、民衆の娯楽、村人の手作りの演劇として非常に人気がある伝統芸能です。ベンガルに限らず、南アジアは演劇、芸能の文化がとて盛んですが、この写真は、国立シルポコラ・アカデミーで毎年行われる、ジャットラ祭の一場面です。

ところで、最近の集計では、このような地域社会で伝承されてきた民衆演劇、ジャットラが、かつてバングラデシュでは二〇〇〇以上、行われていたそうです。しかし、そういう村人が自発的に組織するジャットラが、もうバングラデシュでは、五〇ほどに減ってしまい、絶滅寸前だといわれています。

こういうベンガルの農村社会で育まれてきた文化が、さまざまな理由で、圧迫を受けている。たとえば、ジャットラはムスリム女性のパルダーの教えに反し、偶像崇拜につながるとか、ヒンドゥー教の文化の一部だという事で、それは繰り返し批判されています。

最近も、カントジ寺院の祭礼で開催されたジャットラに爆弾テロが仕掛けられました。そうすると、セキュリティの問題などもあって、関係者は対応に苦慮し、最終的に、各地のジャットラが自粛を迫られるようになる。こうしてジャットラが少なくなりました。こういう問題が、各地で起きています。

このような経緯を、イスラーム過激運動の台頭と見るのか、民族主義者の対抗運動と見るのか、あるいは原理主義と世俗主義とのせめぎあいの問題と見るのかは、それぞれの文脈で



シルポコラ・アカデミーのジャットラ祭 ジャットラ保存協会会長Milan Kanti Dey

南アジアではジャットラと呼ばれる大衆演劇の伝統が広く人気を集める。バングラデシュ政府は1990年代からその規制を行い、2012年には登録・許可制となる。各地で活動する2,000以上の団体が、30年間に約50に減少する。セキュリティ上の理由で当局から上演の許可が得られず、運営が成り立たなくなる。2015年12月には、カントジ寺院の年大祭のジャットラが、爆弾テロの被害に遭う。消滅の危機にあるバングラデシュの伝統芸能のひとつ。

ない。」

その毅然とした言葉には、私も強く感銘を受けました。声を上げ続けることの意味を、この時に教えて頂いたような気がしたのです。

ディスカッション

(司会) ありがとうございます。ここから先は、フロアの皆さまからご質問、コメントなどを受け付けたいと思います。

(Q1) 高田先生がまもなく出掛けられてしまうということで、ぜひお聞きしたいと思つて、真つ先に手を挙げさせていただきました。

なぜ日本人が殺されたかということについて、あるいは彼らが「ルーミーヤ」などでも「十字軍の連中をわれわれは襲うのだ」ということを言っている。ですから、もしそうであれば、一日に殺された方が「日本人だ」と言ったにもかかわらず殺されてしまったことの説明がうまくいかない。それでいて、今回また日本という名前が初めて入ってきたと。それは、どのように理解すればいいのかというところについて、ぜひ聞いておきたいと思います。

(高田) まず、日本人がなぜ狙われたのかということについては、星さんの事件とダッカの事件は分けて考えないといけません。星さんの事件について、実行犯のうちの少なくとも一人は、もう捕まっています。捕まった連中に対する尋問から明らかになったのは、星さんに限らず、その前後に何人かヒンドウの司祭やラジシャヒ大学の先生などが、一人一人ですら狙われています。要するに、事件の予行演習と度胸付けです。それで、テロに対する慣れをつくつておいて、より大きな事件につなげるという予備演習だったことがはっきりしています。

ですから、星さんの事件に関しては、彼は運が悪いことに非ムスリムで現地にいる一人のターゲットとして、偶然選ばれたにすぎません。逆に言うと、ワールドレベルで一人で田舎で活動するのは、これからは日本人に限らず、外国人はかなり注意しないと、いつランダムにそういうものを選ばれるか分からないという意味で、危険性があると思います。



それからグルシャンの事件に関しては、日本人が狙われたわけではなく、運悪くその日にいたから狙われたのです。今日説明しませんが、私の最後のスライドを見てください。このプリントの最後に書きましたが、時刻から考えれば分かるのです。時刻を詳しく分析してみれば、彼らのはあの場所を狙っていたのは間違いありませんが、あの場所にその日、日本人がいるというのはつかんできません。あの日あの場所に偶然運悪く行つたが故に、彼ら日本人はやられてしまったというだけで、日本人が狙われたわけではないのです。その点は明らかです。

ただ、そうは言っても、先ほどの外務省が翻訳したものであるように、要するにイスラームの過激な人たちで、ISに協調しているような人たちの分け方では、もう外国人は文句なしに、そこにいれば狙って構わないと。その一部として日本人がいるというのは、もう明らかなので、逆に言うと、いかに彼らのような活動を抑えることができるかということ自体が、これからの安全のためには重要なのではないかなと。逆に日本人だからどうこうできることは、ほとんどないと思います。

(司会) ありがとうございます。先ほど手を挙げられた方、どうぞ。

(Q2) 本日はお話をありがとうございました。非常に勉強になりました。私は都内で開発コンサルタントをしている山本といいます。事件当時間もダッカにおりました、テレビで怖いなど思いながら中継を見ていました。質問は外川先生に対して二点あります。

まず一点目は、もしかしたら後々お話をされることになっていたのかもしれないが、今回の一連の事件について、BNP、野党の関連についてあまり議論をされる時間がなかったと思うのですが、これについて、もし何かご存じでしたら教えてください。

二点目は、本日のこの会の趣旨の中に、「新たなバングラデシュとの関わりについて」のようなことが書かれていると思うのですが、ここについても、石山さんから少しNGOの視

点からは議論があつたのですが、それ以外の視点から何かあれば、教えていただけるとありがたいです。お願いします。

(外川) ありがとうございます。BNPの立場でいうと、特に戦争犯罪法廷の問題が起きたとき、非常に微妙な立場に置かれたと思います。

シャハバグ市民運動を支持する立場に立つことは、アワミ連盟党と同じ土俵に立つことを意味し、国会選挙では協力関係にあるイスラーム政党を敵に回すことにもなります。しかし、イスラーム政党と声をそろえて、市民運動を無神論者として否定することは、バンングラデシュ・ナシヨナリズムを標榜するBNP党としては困難なことで、結局、この運動に対して明確なスタンスを取ることができず、BNPは困った立場に追い込まれてゆきます。

逆に言うと、それをアワミ政権はうまく野党対策に用いることで、二〇一四年の国会選挙を乗り切つたと言えると思います。BNPは、JI党などのイスラーム政党と選挙協力を行い、連立内閣もつくつてきたので、その協力関係を否定することができない状況をアワミ政権はうまく捉えている。それが、BNPが現在の状況に追い込まれてゆくことにつながってゆくのだと思います。

今回のテロ事件が起きた時、政府をはじめとして、すぐに各政党は、テロとの対決という姿勢を明確にしました。実は、JI党（ジャマアテ・イスラーミー党）もまた、「テロは誤りである」と述べて、あらゆるテロ活動への反対の声明を出しています。その点では、政府も野党も一致しているはずなのですが、しかし、これまでお話しをしたように、その中でいろいろな問題が起きていることが分かります。

「新たなバンングラデシュとの関わりについて」という事については、この問題は、ゼヒフロアに広げて、皆さんのご意見をいろいろとうかがえればと思つています。特に、現地の人々の文化や言葉を理解することの意味ですが、それによって、しかし、これまで言われて

きたような、親密さが安全を担保する訳ではないという問題は、とても重要な指摘だと思います。

これについて、今の私が考えていることは、理解することを止めて、しかし、それで危険が回避できる訳ではない、という事です。ベンガル語によってしか聞くことのできない事情も多いと思います。これは、むしろシャムシユル・ラフマンさんの声に励まされて、という事になると思いますが、だからこそ、私たちもまた、前に進むことを止めてはいけない、と思っております。

(司令) 他に質問が。

(〇〇) Hello. Thank you very much for the wonderful presentation. My name is Siddigur Rahman. By training I am an anthropologist and I teach anthropology at a public university in Bangladesh. I have actually two questions. First, in a sense, Professor Togawasan, could you please tell a little bit more about is there any relationship with the forces of globalization in Bangladesh and the rise of the kind of terrorism we have seen? In your eyes, what is the basic difference between the Gulshan attack and the attacks in the past? Can you tell us something on that?

For another question from me, it would be like essentially I feel this is sort of a complex identity politics that have been going on right after Bangladesh was born in 1971. One of the key stakeholders is the state. The state as an entity or agent has played a significant role, and how that role over time has been shifted for some politicians in the country that helped them either to stay in power or somehow to linger in their position of power. Could you please tell us about the complex role of the nation state of Bangladesh and the complex politics that have been played out? Thank you very much.



(Togawa) Thank you for your question. As for the difference of Gulshan before and after, it is reported that the government officially denies its strong relation with ISIL and its global network, so this is the point. Basically I agree that the government denies its direct relation with ISIL. It is rather easy to understand as a continuous process of development over the issues inside Bangladesh, but at the same time we cannot avoid the global influence of international society. Particularly, it is the age when the youth generation can easily access to the internet.

(司会) では、また他の方で質問があれば。

(Q4) どうも今日はありがとうございます。私はジャーナリスト兼南アジア研究者の竹内と申します。高田先生と石山さんにお聞きしたいことがあります。ラマダン期間中に気を付けるべきことをあらためて伺いたいと思います。

今回七人が亡くなられて非常に不幸なことです。これはとても不運も重なって、本来は六月末から現地に入る仕事だったはずが、急きょ調査の都合が早まってしまって六月一〇日に現地に入りました。本来はラマダンの期間を外す予定で組まれていたものが、早まってしまったという事情もあり、その期間に仕事をして、引き上げる間際の人が事件に遭ったということも聞いています。

私自身、バン格拉デシュでは、あまりラマダン期間中、仕事をしたことはないのですが、例えばパキスタンやアフガニスタンでラマダン期間中に取材に回ると、やはり非常に気を付けなければならぬことがあります。昼間、人前で水を飲むのもまずいということ、一回、猛然と怒られたこともありまして、そういうことで「気を付けよう」ぐらいに思っていたことなのです。やはりこの七・一の事件以降、本当にラマダン期間中はもつと気を付けなければいけないのかなと、いろいろ思ったりするのです。特に高田先生のご経験、それから石山



さんのご経験や活動上のいろいろな注意事項などがあると思いますが、そんな話をお伺いできませんでしょうか。

(高田) ラマダン期間中に気を付けるべきことは、正直に言って二つ、分けて考えた方がいいのですが、場所については、あの場所がそもそもまずかったと私は思っています。それについて、私はブログにもすごく細かく書いたのですが、ここで簡単には説明できませんが、すごく簡単に言ってしまうと、あそこは攻撃されやすい場所だったのです。だから、そもそもあんな所に行くべきではなかったと私は思っています。外国人には静かで、バン格拉デシユにいますと、確かに人ごみが多くてうんざりするの分かりますが、でも、ああいう静かな場所は、逆に言うと非常に危ないのです。だから、その点は一つ考えてみる必要があります。これはラマダンの問題と何の関係もありません。

もう一つは、ラマダンの期間中ずっといた経験は、私もほんの数回しかありません。でも経験から言うと、仕事がすぐやりづらく、効率が悪くなります。事務所が開いている時間も短くなりますから、その時期に行ってわざわざ仕事をしなければならない必然性があるのかと。非効率なのは分かっているのです。だから、仕事の効率を考えたら、自分たちがその期間は都合がいいから行くという考えではなく、その期間を外した方がむしろ仕事の効率が高まるのではないかという気がします。ですから、そもそもラマダン期間中に現地に行つて気を付けることというよりは、その時期に仕事に行かない方がいいのではないかというのが正直なところですね。

(石山) 高田さんがおっしゃっている以上のことは、もうないのですが、ラマダン期間中は、現地の人があまり動けないので、私たちも大きな計画はいれませんが、日本人も帰ってきてもらうことが多いです。調査もできないし、イベントもできません。ただ、私たちは今、生活習慣病対策をやっているのです、断食中の健康管理を見るために、ラマダン中に現地に行った

ほうが良い、という話が出ることはあります。

今回のことは、時期と同時に場所が重要だったと思うのですが、NGO側として言いたいことは、私たちは外交エリアであるグルシヤン、バリダラといったエリア以外のところでの活動がほとんどで、外国人が集まる場所もほとんど行きません。外国人がいない場所の情報、自分たちで集めるしかないのです、常に自分たちで集めて、一定の緊張感を持って動く習慣がついていると思います。そうやって考えていくと、あのエリアがバングラデシュの一般の人にとって、どう映っていたのかというところは、やはり日本人はもう少し考える必要があるのではないかと感じました。

すみません。ラマダンという期間ということとはあまり関係せずに。いいですか。

(Q5) 東京外国語大学の谷口晋吉です。一つというか、二つぐらい伺いたいのですが、一つは星さんの例です。ロングプールというのは、実は私がフィールドをやっていたところから自転車で四五分ぐらいのところぞっとしたのですが、あのケースとグルシヤンのケースとをつなぐものがあるというのが、高田さんのお話にありました。私は、たとえそういう尋問の結果があつたとしても、そこはつながりにくいのではないかと気がします。

あれは、リキシヤで彼が移動しているところに、刺客が来て撃たれてしまいました。でもロングプール在住の人間が恐らくやったのだらうと。そうすると、今度のグルシヤンのケースはどちらかというと、外川さんがおっしゃったような独立戦争、その後の処理に対する不満、それからジャマーアテ・イスラーミーやBNPとの対立、そういったコンテキストの中で読み込める可能性の方が強いのではないかなという気がしています。

そうすると、このバングラデシュのテロというものは、決して一色ではなく、幾つかの流れがある。しかも、その幾つかの流れが、もしあのロングプールのケースがグルシヤンとながっているとすると、非常に怖いと思うのです。つまり、ジャマーアテ・イスラーミー系、



あるいは反政府系のホームグロウンという言葉を何度か使われていましたが、そちらのケースと、あまりベンガルの中のことなど関係なしに、海外から、世界的なところからひよいとやってしまったという高田さんの話、その二つがドッキングするというのが一番怖いと思うのです。そのあたりに関して何か情報があるか、あるいはお考えがあればと思います。

(高田) 星さんのケースについては、現地の警察の言うことです。バングラデシユの警察は時々冤罪もやりますから確実には言えません、やった三人のうちの一人がもう捕まっているのです。その捕まった一人が、星さんを実際に自分たちがやったと自供していて、それがグルシヤンの事件ではないのですが、その前後にシヨラキアの事件があつたり、このロングプールで殺されたのも、彼らの一味の仕業だということは、はっきりしています。だから、そういう意味でつながっていると聞いたままでです。それが政治的なものでやったというのなら、また話は別だと私は思いますが、明らかに彼らは正直言つて大きな事件を起こす度胸付けでやったと言っています。実際にその人物はロングプールではなく、北西部（主に広域ラジシャヒ地域）の人間です。だから、まず地元でやってみて、それでダッカに出てきて、もつと大きなことを起こそうとしていて捕まりました。

実際に今回のグルシヤンの事件もそうですが、このロングプールで殺された人たちもシヨラキアも、圧倒的に多いのは北西部の出身者で、ボグラ、ロングプール、ラジシャヒなどの出身者が七〇八割ではないかと思えます。

(Q6) インドを勉強している押川文子と申します。今の谷口先生のご質問と、少し重なるのですが、外川さんに質問させていただきます。

外川さんは、今日のお話の限りだと、基本的に今回の事件をバングラデシユ独立前後からの排外的な過激なイスラーム支持者というものの文脈の中に位置付けておられて、そうするとそれに対抗する者は、一種のベンガル・ナシヨナリズム、あるいはそれを前提としている

パングラ的ナシヨナリズムという構図を置いておかれています。

竹内先生も触れておられますが、今回の事件は本人たちは何も言っていないし、ISILはいつも適当な声明を出すだけで、実はよく分からないと思うのです。本当にその文脈で捉えられるのだろうか。つまり、対抗するものは、ベンガル文化の見直しや、いろいろな多様なものを含む、より穏やかで緩やかなベンガルコミュニティというものの再建が、こういうものの防止というか、入ってこないことの保障になるだろうかというのが一つです。

それに関連して、高田先生が少しお話になっていましたが、では外国から入ってくる、あるいは外国でトレーニングを受けて、よりグローバルなところに今回の事件の由来があるとするならば、そのときに、国境を挟んだウエストベンガルを含めて、ベンガルやインドなど、南アジアというつながりが、今日は中東の専門家も何人もいらしていますが、中東やあるいは中東からヨーロッパに延びていくようなものと無縁なのか、あるいは連動しているのか。一番怖いシナリオは、アジア、特に南アジアという非常に文明的にはつながっている大きなところに、もう一つこういうグローバルな暴力行為の一つの基盤が形成されたり、それが東南アジアとも結び付くような構図は非常に恐ろしいシナリオでもあると思うのですが、そういうものを考えるべきなのか。

ベンガルの場合、よりややこしいのは、ベンガル・ナシヨナリズムというのは、今のウエストベンガルにもつながっていきますので、二重の意味で怖いわけですが、そのあたりはどうなのでしょう。

(外川) ありがとうございます。ご指摘のとおりだと思います。その点は説明が足りなかったかもしれませんが、谷口先生のご指摘とも重なる問題と思われ、国内でそのような緊張が高まっていくことと、今回の事例で言うところ、グローバルなISILのような動きが、ちょうど連動する形で、今回の事件が起きたと捉えられるだろうと考えています。



象徴的なのは、やはり日本人が標的に入ってしまったことですが、これまでの文脈で言うと、たとえばクーデターが起きても、「日本人だけは安全に」という形で配慮される、特別な存在だったと言われます。しかし、今回の事件では、仮に私が現場にいても、「日本人だ。だから、撃たないでくれ」と叫んだと思うのですが、それを犯人は容赦をしなかった。このような事態は、確かにご指摘のあったような、大きなグローバルな流れの中で考えないと分らないことで、それが今回は起きてしまった。その辺りが、やはり新しい段階に入っていることを示しているのではないか、と思っています。

それに対して、既存のナシヨナリズムを鼓舞することだけで解決はしないというのも、ご指摘の通りだと思います。

ただ、この事件を受けて、知識人や政治家がいろいろな声を上げているのを聞き、また、歴史の中で、シヤムシユル・ラフマンさんやフマユン・アザドさんなどが語る知識人の声に耳を傾けてゆくと、ともかく、このような声を上げることが止めてしまったら、それこそテロリストの思うつぼではないか、と考えています。

人々が恐怖で口をつぐんでしまうことが、まさにテロリストの狙いだとも言えるので、バングラデシユの人々もまた、声を上げ続けているのではないかと思っています。

(司会) 最後にお一方、お二方という感じだと思のですが、お二方が今手を挙げていらつしゃるので、両方とも。

(Q7) 今日ありがとうございます。私たちはガジプールという所で、幼稚園、小学校をつくっているNPO団体で、今回の事件でも心を痛めている者です。今日、外川先生のお話で、大学でもっと歴史や文化について勉強した方がいいのではないかと伺ったのですが、例えば小学校、中学校の段階からでも、自分たちの国の文化や歴史についてもっと深く勉強するようなカリキュラムを考えると、そのようなことをしていくと効果的なのかなと

一つ思いました。学校の事情などで、やはり今はどうしても英語とベンガル語と数学あたりにしか、なかなか力が入れないのですが、そのような工夫を幼いときからしていくことへの効果のようなものを、私たちは考えた方がいいのかと、今日お話を伺いながら思ったので、そのあたりについて一点伺いたいです。

もう一つ、とても心配しているのが、高田先生のお話の中で、ガジプールでこの間もテロリストと思しき人が一人射殺されたという話を聞いて、連日のようにテロリストと思しき人の射殺が相次いでいて、捕まって、話を聞くことなどが全くなく、一方的に射殺されているというこの状況を見ると、かなり政治的なものと絡んで、無謀なことが行われているのではないかと。そうすると、この後、禍根を残して延々と争いが続くのではないかと思つて、そのあたりを皆さんはどのように見ていらつしやるのか。

その二点を伺いたいと思います。お願いします。

(高田) すみません。時間がないので一言だけ。ガジプールの件に関しては、射殺された犯人側が、少なくとも最初に一〇〇発撃ち返しています。ですから、一方的に殺されたわけはありません。誤解があるといけないので、詳しくは今日の新聞を見てください。以上です。すみません、今から広島まで帰らなければいけないので、これで失礼します。

(南出) 教育に関してのところを代わりに答えさせていただきます。最近、教育熱というか小中大学まで含めて、「GPAシンドローム」と言われるぐらい、小学校五年生からある全国統一の試験で満点(GPA50)を取るのを目指すという、知識偏重教育がすごく浸透していると言われています。私立の大学はその典型でした。しかもビジネスに役に立つ教育というものが強調されています。それに対して今回の事件の後、特に都市部において、もっと人文教育的を、あるいは教養教育をもっと広く学ばなければいけないと言われるようになってきます。

ももとは文化的な教育、あるいはいわゆる国の歴史などがカリキュラムに含まれ強調されて教えられているはずが、ビジネス志向のなかで軽視されつつあることへの懸念を、今回の事件が導き出したのです。

(Q8) 私は一九九一年八月から一九九一年末までバングラデシュにいて、一九九一年の民主化の選挙をずっと見ていました。私は大使館の政務班長で、ハシナのアワミが圧勝するという展望をしました。結果は全く逆でした。西側の新聞情報などいろいろ集めてみましたが、全部外れました。だから、後でバングラデシュの人に聞いたら、「バングラデシュはムスリムの国ですから、BNPが圧勝ですよ」、これで終わりでした。

あまり考えすぎると、バングラデシュの内政もしくじるなという感じを持ったのですが、私がいつも考えているのは、バングラデシュのアイデンティティ。これはバングラデシュの人は絶対に言いませんが、表情を見ればよく分かるので、バングラデシュのアイデンティティが非常に曖昧。バングラデシュというのは、どういう国なのか。「イスラームの国です」「イスラームの国なら、パキスタンと同じではないですか。どうして独立する意味があつたのですか」「いや、バングラデシュは、ベンガル語を話すベンガリ文化の国です」と。それだったら、インドだって、九〇〇〇万から一億人近くベンガル人がいますから、別に独立する必要もないのではないですか。このアイデンティティ・クライシスに、バングラデシュは無意識のうちにつつと四〇年間ぐらい入っていると思います。

その中で今、政治家が「どっちなんだ」と、勝負のときに出たのだなど。いや、やはりセキユリズムにいきましょうかと。イスラームの国はそれでいいけれども、どんな宗教よりも経済発展が大事ではないですか、これでいきましょうということ、ハシナが政権を取って、どのように取ったのかよく分かりませんが、やっています。

それで、このテロリストというのは、絶対にこんなベンガル・ナショナリズムに負けては

いけない。バングラデシュは、イスラームの国なのだ。ここは過激派で、人を殺す以外、バングラデシュの人の目を覚ます方法がないではないかというのが、根底にずっとあるのではないかと私は思っています。皆さん、どう考えておられますでしょうか。

グローバルに言えば、イスラーム文明というのは、キリスト文明よりもずっと発展していたわけです。キリスト文明というのは、本当にど貧乏で、どうしようもない、ど田舎で、みんなイスラームから科学から全部学んだわけです。そのキリスト教が今、大きな顔をしてやっていることに対して、イスラームの人間はばかにされて、もう耐えられないのではないのでしょうか。ここらで命を懸けてでも、われわれのイスラームのアイデンティティを取り戻すのだというので、意識的にしろ無意識的にしろ、やっていると思うのです。これは私の独断と偏見ですが、皆さんはどのように考えておられるか、お聞きしたい。時間がないですから一言でいいですよ。ぐちゃぐちゃ言わなくて。

(南出) 難しいのですが、私はバングラデシュのムスリム・アイデンティティというのは、もちろんあると思います。非ヒンドゥーという文脈でのイスラームというのはあると思いますが、イデオロギー化されたイスラームというよりは、日常実践の中での信仰、「ムスリムとしての生き方」が大切にされてきたのではないかと思います。しかし、現代の文脈の中で、イスラームの共通性のようなことが意識されていくといった、さまざまな影響の中で、変わりつつあるのも確かだと思います。

(外川) 私の方では、アイデンティティは確かに曖昧なもので、恐らく他者との関係性で規定される。バングラデシュの場合、まずは印パ分離ですね。イスラームを選んでパキスタンと一緒になった。その後、パキスタンと戦争をして、世俗的な民族主義で独立しました。この二つの関係性、インドとの関係性が強調されると、インドの西ベンガル州の問題が起きる。パキスタンとの関係性は、そうしたらイスラームで宗教を強調すると、ではイスラームの理

念で、もう一回パキスタンと一緒になればいいではないか。この問題がいつも繰り返される。この二つの原理を、私はポストコロニアルの二重拘束と呼んでいるのですが、このような歴史的に形成されたアイデンティティーの問題が、今も影響を与え続けているというのが、私が見ているところです。

(石山) すみません。野呂さんのご質問には難しくてちょっと答えられないのですが、ベンガル人のアイデンティティーというのは、やはり「黄金のベンガル」に象徴されるベンガルデルタの自然の中で生まれたものだと思います。そういうことを考えると、都市化によって、大河下流域のならではの暮らしか文化が離れていくと、ベンガル人のアイデンティティーを保つていくのは難しくなっていくのではないかと考えています。

(目下部) ありがとうございます。私も、外川先生のご意見と同じような考えをもっております。バングラデシュ人の集団的なアイデンティティーは、反パキスタン、反米、反ヒンドゥーといった、政治・社会的な文脈に沿って使い分けられているように思います。

その上で、個人を構成する要素として、ベンガル・アイデンティティとムスリム・アイデンティティがどのように作用しているのか、これは非常に難しい問題だと思います。

ただ、アイデンティティ・クライシスが個人のレベルで問題になっているわけではなく、特定の集団が政治的に動く際に、個人のアイデンティティを利用しているのではないかと考えています。

(司会) ありがとうございます。時間の方が過ぎましたので、皆さんからいろいろお話を伺えて大変盛況な会議になったと思います。

最後に閉会の辞ということで、日本バングラデシュ協会会長の堀口さんから、一言お言葉を頂きたいと思います。

閉会挨拶

堀口 松城 (元バングラデシュ大使、
日本バングラデシュ協会会長)

(堀口) 大変時間も迫っておりますから、簡単に一言申し上げます。

今日のこの数時間に及ぶバングラデシュの最近のテロ事件をいろいろな角度から、外川先生がマクロな視点から問題を一つずつ提示し、それがまた、高田先生はそこにいらしたのではないかと思うような、何である日、あの時間に行なったのかということについて、非常に突っ込んだ分析をされました。

さらに南出先生は現地調査を踏まえた、農村の若者たちの考え方、行動を踏まえた上での分析をされました。

それから、石山さんは前から存じ上げていたのですが、十数年のアジア砒素ネットワークの活動を通じながら、現在のバングラデシュの新しい問題をお手伝いしようとしているという事で、本当に皆さんの分析、意見に感銘を受けました。

同時に外川先生のお話にありましたように、彼らがやはり戦争のことを総括していないのではないかというのは、実はわれわれ日本人も、この間の戦争を総括していないのではないかと思います。立場の異なる人々がそれぞれの立場から書いたものが混乱の原因だったのではないか。それが七〇年たって、ようやく少しずつ収れんしているのかと思います。

それから、石山さんが言われたように現代のバングラデシュの問題というのは、かつて日本が通ったのと同じあの道ではないかと思われます。そういうことを考えますと、やはりバ



ングラデシユにとって最も親しい友人の一つである日本が、今後ともバングラデシユの問題について、いろいろなアドバイスを出していけるのではないかと、今日のセミナーを通じて感じました。

こういう日本のバングラデシユ学会の進歩ぶりに大変心を強くいたしました。今後ともぜひ発展を続けて、日本とバングラデシユの関係強化のために頑張っていたいただきたいと思えます。今日はどうも大変ありがとうございました。

(司会) ありがとうございます。では、これでプログラムは全て終了いたしましたので、皆さま、ご参加いただき、ありがとうございました。

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の 可能性の探求―人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」

基幹研究人類学班では二〇一六年度から、アジア・アフリカにおけるグローバル化や近代化に伴う現代的諸問題への対処という課題をふまえ、研究テーマ「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求」を展開する。この研究テーマは、「アジア・アフリカ地域の諸問題の正確な理解に基づき問題解決に貢献するとともに、その研究成果を国際的に発信する」というAA研の中・長期的目標に照応するものであり、現代社会の抱える喫緊の課題に対処するものである。

グローバル化や近代化については、欧米中心な理解では把握できないリスクやハザードが世界各地において現在進行中である。すなわち、人には御しがたい狭義の自然的災害のみならず、各種の紛争、環境変動、人口変動（限界集落問題など）、経済危機も含む、生活全体が脅威に晒される状況である。こうした状況が昂じるにつれ、理性に基づく近代的テクノロジーによって、政治・経済・社会的事象はもろんのこと、自然現象さえも人間にとって好ましい方向にコントロールしうるとの認識が、さまざまな地域において複数の異議申し立てに直面し、それに有効な答えや対処法を提示できずにいる。

本基幹研究では、このような硬直した事態に対応するため、それぞれの地域に根付いたやり方Ⅱ「在来知」の可能性をあらためて検証することを提唱する。多くの人類学者が明らかにしてきたように、アジア・アフリカの日常生活において人々は、「在来知」を駆使して新たな現実に柔軟に対処している。しかしながら、その多様な「在来知」は個別の文脈に留め置かれ、広範な知的影響力を獲得するに至っていない。

こうしたアジア・アフリカの「在来知」を、本基幹研究が「人類学をめぐるマイクロマクロ系の連関」という主題のもとで整備してきた理論的・方法的地平から捉えなおし、リスク・ハザードに対処する人類の知を統一的に構想することが本研究テーマの目的である。こうして得られた「リスク・ハザードに対処する在来知」をめぐる知見は、日本を含む世界のどこにおいても検証や適応が可能である。基幹研究に集う人類学研究者の使命とは、アジア・アフリカからの「在来知」の個別を越えた多様な状況への適応可能性に道を拓き、国内外に向けて発信し、アジア・アフリカの諸問題の解決に寄与することであるにちがいない。

ダッカのテロ事件とバングラデシユの若者たち―その背景とこれからを考える
基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求

―人類学におけるミクロマクロ系の連関2―

二〇一六年度 ワークシヨップ

編集責任…外川 昌彦

編集補佐…郷田 りか・池田 昭光

発 行…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の
可能性の探求―人類学におけるミクロマクロ系の連関2―

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―一―

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://www.aatl.u-tokyo.ac.jp/kikanjirui/>

発 行…二〇一七年二月一四日

表紙デザイン…中村 恭子

表紙写真…事件のあったレストランに向かう路地の入口。マンションの立ち並
ぶダッカの高級住宅街グルシャン地区にて。(二〇一六年八月八日、

外川昌彦撮影)

印刷・製本…株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三

